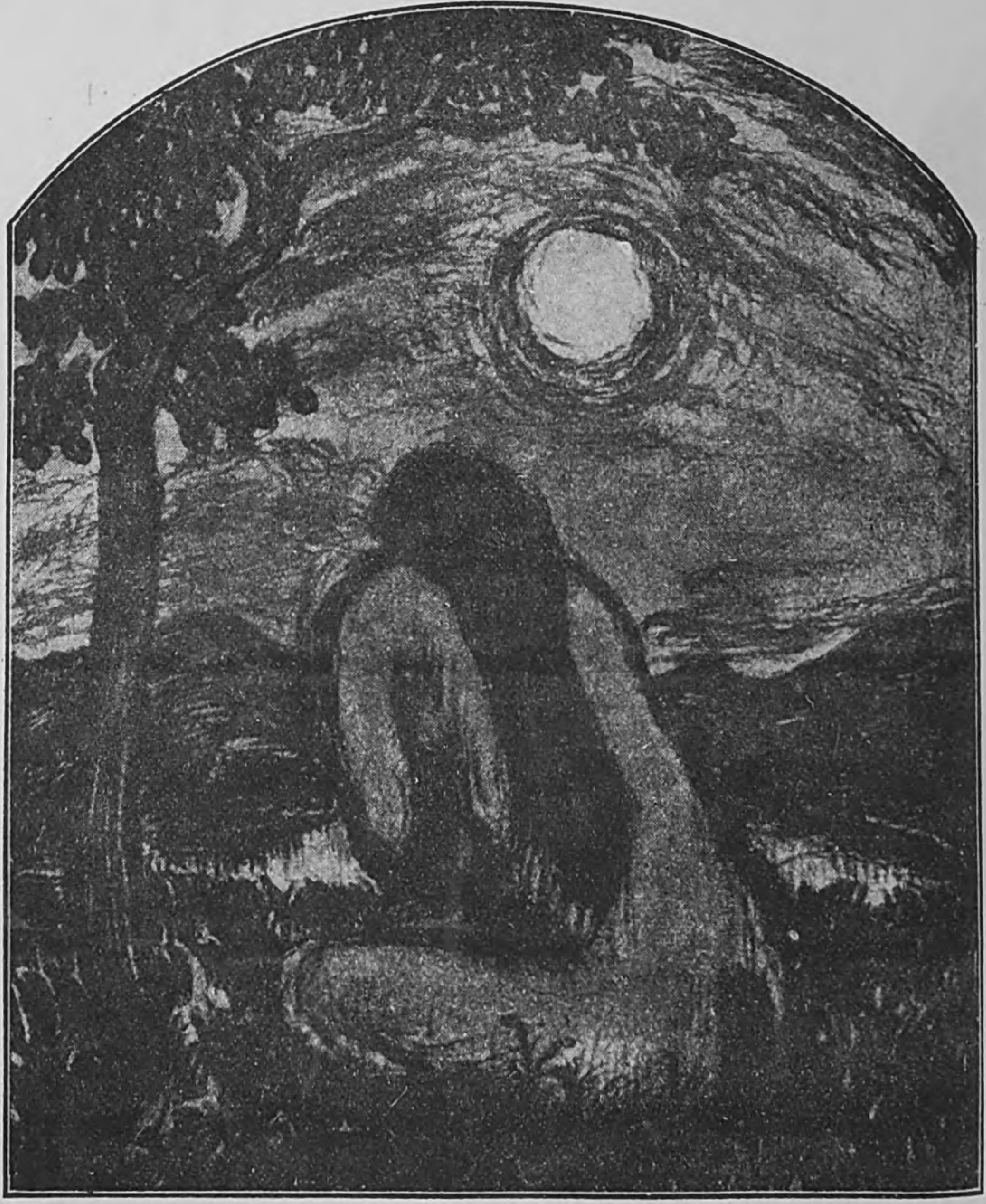
青鞜



三月號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青韜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三月號目次

女子の教育に就いて（飜譯）　一　山田わか譯
冬の終り（小說）　八　山田邦子
四篇（對話）　二六　岡田ゆき
眞暗にありて（短歌）　三八　三ケ島よし
旬日の友（小說）　四二　菅原初

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

A と K 子（小説）　六七　有田勢伊

女友達（感想）　七三　川田よし

愛する師へ（小説）　八九　千原代志

歌舞伎座の二月（劇評）　九七　岡田八千代

編輯だより　一〇五　伊藤野枝

表紙　奥村博

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子の教育に就いて――山田わか譯

此の論文は社會學の泰斗ウォード氏著ダイナミック●ソシオロジー（一千八百八十三年出版）の一節を抄譯したものである。今より三十有餘年も古いものだが氏は已に其の中に婦人問題に關して多く論じて居る。氏の最近の結論を紹介するのが適當だとも思つたが、順序として、且つ又古くとも今の世に益する處少からずと信じて拙譯したわけである。解し易くするために原文を取捨した處はあるが大體の意味には違ひのないつもりである。

普通教育と云へば男性並びに女性の教育を意味する事は勿論である。だが世間には、人類と云ふやうな言葉を使ふ場合に於てすら、特に、女性をも含むとつけ加へなければ男性とのみ考へるのを殆んど習慣にして居る人が澤山ある。實に此れは女性の存在を全く無視した不合則な事である。

普通教育が延長されて行く範圍內に於て、男性女性に平等な教育を與へる事は唯に女性の利益計りでなく男性の利益でもあると云ふ議論は充分證明出來るが、今此處にしばらく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一歩ゆづつて、先づ、一般の論者の云ふ通りに、男性を社會の上位に置き、女性は唯人種を續ける手段として存在して居るものと見ても、猶生物學の原則を知り、其の原則の上に社會學上の眞理は大部分あると云ふ事を承知して居る社會學者は兩性の平等なる發達を主張せざるを得ないのである。最近の人類進歩に付いての理論はたとへ遺傳の原則を無視して居ないにしても、少くとも遺傳の働きの主要な點を見のがして居る。子供の性質は父母の其れを兩方から受けて出來上がつて居ると云ふ事は普く人の知る事である。しからば、男親が教養された人間で女親が生れたまゝの人間であるとすれば、其の二人の間に生れた子は男親からは或る有要な質を受け得て居るが女親からは何にも得ない事になる。であるから、子孫に有益な性質を遺傳する事に費されたる精力の全き價値を其の子孫に實現させやうとすれば、兩親の上に平等な教養が與へられてあらねばならぬ筈である。故に、今日の大部分の女性の位置のまゝで、女性を、唯、子を生む機械と見て、社會のあらゆる其の他の仕事は全部男性のなすものとしても、猶此の場合に女性の教育のために費された費用は次の時代の男性の上に、少しの損失もなく現れる事になる。であるから、人類の智力の發達を早める手段として人爲淘汰を主張する論者は女性の教育と女性の一般の智力の進歩によつてその主張の實現の第一着と見て居るのである。現代社會の傾向は、人類の發達を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

計るためには、少數の完全なる人間から高等な人種を作り出そうと試みるのであるが、併し凡ての男性及び凡ての女性を出來るだけ完全に近くした方が大規模に於て高等な人間を作る目的は達せられるわけである。

前述の如く男性と等しき女性の教育はそれだけで既でに價値ある事であるにも拘らず、女性を、唯、種族を續ける道具と見るのは野蠻時代の女性觀よりも一層俗惡な考へである。人の價値は社會が其の人に與へる其の價値によつて定まるものであるから、女性は文明の上にはゼロだと社會が云ふ以上は女性は何時迄もゼロである。婦人解放に反對の論者は、婦人は文明に貢獻する事皆無だと大聲に云ふ。そして一方に於ては婦人解放論者は婦人の例外な行爲を並べたてゝ其れに對するのが常であつた。處がそれは反對者の攻擊に對する答辯にはなつて居ない。贊成者がこれ以外の事を云ひ得なかつたのは實に妙な話である。が先つ凡ての事實は事實と認めても、猶因襲の勢力が、何故、女性が許されてある範圍外に、女性の働いた仕事が數が少いか、又劣等であるかと云ふ事、又何故、女性の腦は男性の其れよりも小さく、道理ある力が弱いかと云ふ事を、充分說明する。とくに注意したい事は、今日迄に女性が幾分なりと文明に貢獻した仕事は皆彼女が因襲を破つてした事である。なせなら、因襲は女に活動はするな、男を悅ばせよ、子を生めよと命令して居た。そして此

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の命令の力が如何に大なるものであつたか、如何に暴力を持つて居たかは人皆の知る處ろである。であるから今日女性が萎靡した狀態にあるのは無理ならぬ次第で、たとへ僅かとは云へ今日迄に彼女が仕遂げた仕事は驚嘆すべきである。もし此れが男性と位置が替つて居たとすれば男性には此れだけの事をもなし得なかつたかも知れない。

女性の腦の小さいと云ふ事は適要（アダプテーシヨン）の原則でよく說明出來る。腦は使用するから發達するので、さもなければすぐ收縮してしまうものである。女性の原因的能力の發達しなかつたのは其の能力を働かせなかつたからである。女性は先天的に劣等であり、文明に於てはゼロであり、文明の厄介者だと主張する科學的の詭辯は、牝獅子は雄獅子よりも輕いとか、又は雄牛は牝牛よりも強いとか云ふ理由のものとに、此は他書に於いて說破して置いた。そして女性は生來男性よりも天然の惠を受けて居る、則ち男性よりも都合よく造られて居り、且つ遺傳的に男性に優ると云ふ事は自然界から確かな證據を得る事が出來る。生物學上の原則はあらゆる生の根本へさかのぼつて發見せねばならぬのに多くの博物學者は高等動物によつて普變の原則を造り出そうとするから、彼等は必然偶然な現像をのみ捕へる事になる。そして迷宮に踏み入る事になつたのである。脊髓動物の研究を一生の仕事としたクビエルが誤道に陷つたのは、むしろ此の生のオリジンを無視したからである。此に反し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てラマークは無脊動物や植物を專門に研究した故にクビエルの結論が破毀されたのにも拘らず、彼の原則は今、猶、有力なものである。

哺乳動物の男性は常に秀越な體軀を有すると云ふ事は明白な事實である。が此れには多くの博物學者の了解しなかつた原因がある。それは一般男性に共通なものではない。又女性や子供を保護すると云ふ貴い盡力から強くなつたのでもない。そして又どの方面から見ても其が先天的であるとはどうしても云へない。優越と云ふ事、それだけが決して終局原因ではない。進化論的テレオロジーの見解からは、其れが、目的として曾て求められたのではない。高等動物の男性がまさつて居ると云ふ事は第二義的、性的のものである。なぜならば女を奪ひ合ふため、男性同士爭つた結果彼は強くなつたのである。馬、牛、鹿なぞの雄が大きさに於て力に於て美に於て雌にまさるのは此の理由にあるので、決して妻子のために食物や住所を得るに心身を勞した結果ではない。

故に自然は最善なり。人は自然を模倣すべしと主張する處の議論を論理的に押しすゝめて行くと、必然人は此等の動物の仕方を眞似ねばならぬ。そして女を奪ひ合ふため、もう一度人は爭はねばならぬ。なぜならば其の努力が男性を優越ならしめ、彼の腕力を發達させるのであるから。そして彼等は女性にまさると云ふ名目を誇る事が出來るであらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

社會が女性に與へた活動の範圍は女性の目的及び仕事をせひ〳〵男性の其れと異つたものにしてしまつた。女性に對する理論はこうである。結婚期に達した凡ての女は、自身を保護するに堪へ得る男子に嫁する事。女の唯一の義務は子を生み、夫の家事をとり、そして夫の趣味に隨つての飾り物になる事、等である。そして生產、交換、分配、政治、戰爭の如き勞力は皆男性の仕事である。もし女性にして此等の仕事にたづさはれば其れは社會の習慣を破つた事になる。從つて女ば男子と同じやうな勞力をしても、同等な生產をしても其は非常に割引をされてしまうのである。女は自分自身の處置の出來得ないものと目されて居るのである。其の服裝の如きは、とうてい、活動に堪へられない樣になつて居る。もし女が(男の保護のない)與へられた範圍外に出て、働き得た所得は、後に其の女を所有した男の財產になつてしまう。未婚の女の生存の唯一の目的は結婚である。故に女は他の一切は忘れて其の事に全力をそゝぐ。彼等はあらゆる手段で結婚を求める。男子が金錢上の利益を得るに汲々として居るやうに。であるから女は結婚に失敗すれば人生全體をむだにした事になる。そして卑しめられ、惡名を付けられるのである。

今迄私が述べて來た事は、尊敬を拂ふに足る例外のあるのは勿論だが、此れは皆女性に關する文明國の輿論であつて、決して私の誇張ではない。こうした狀態にあるのだろう、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

正當に考へたなら、女性が文明に貢獻出來ないのは當然な事である。故に野蠻的な因習的な女性に對する法律さへ撤回すれば女性も男性と同じにやうに働く事が出來る。たとへ僅かでも今日迄に女性が現した力はよく此れを證明して居る。そこで女性を男性と同等に敎育する目的は、女性に夫探しのわなをかけたり、又夫を悦ばすために飾り物になる事の外に何ぞ文明に貢獻する何物かをさせやうとするのである。女の仕事はいたる處に溢れて居る。たとへば母であつても、なくても、兒童に對する敎育事業の如きはそれである。此の敎師と云ふ女性に適切な女性の仕事だけでも女性を社會的に男性と平等に敎育せねばならぬのである。女性の心理狀態は男性の其れと比較すると多くの要用な關係に於いても相違があるかも知れない。併し其れは唯感情の部分だけで智力に於いては少しの優劣もないのである。智力に種類はない。智力に適當な營養は眞理である。故に女性が敎育として要求する處のものは男性の其れと同じである。——則ち知識（ナレツヂ）である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冬の終り――山田邦子

（N・Cと呼ぶ婦人より聞きたるまゝ）

されどヱホバよなんぢは我をかこめる盾わが榮えわが首をもたげ給ふものなり、われ聲をあげてヱホバに呼ばはれば其聖山（きよきやま）より我に答へ給ふ（詩篇第三篇、三、四）

血を問糺（ごひた）し給ふものは苦しむものを心にとめてその號叫を忘れ給はず。（同第九篇十二。）

神よ、

此愚にしてけがれたる、邪（よこしま）になやまさるゝ且つ頑固なる……されど淋しく常にひそかによき道を慕ひ、たのみたのまれて親と言ひ子と言ひ愛し愛さるゝものを求め、自、今力なけれど正しきに歩みたしとた願ひ、かゝる自らを此まゝ許し一歩一歩をいつくしみ給ふものを、恐れつゝもなほ求めてやまぬ此者を御心にとめ給へ、吾を憶え給へ、み慈愛（なさけ）の故をもて吾が祈りに耳をかたむけ給へ。

ほんとうに自分の心のすむやうな眞實の道に歩み出したいものだといふ考への頭に浮び

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

始めたのは丁度今から十年程前の事であつた。それはほんとに今から思へば空想的な、又自分を忘れて理屈にばかりなやまされたやうなものではあつたけれど、然しそれが自分の心の底深く一番行きつめた問題であり、考へさせられ、なやまされ、責められ、さいなまれて來た事であつた。

聖書を始めて讀んだのは十六の時であつた、其時自分は罪せらるべき者、自分は不正なものであるといふ事が思へて物怖ろしさが黑く心にかゝつた。

どうか正しい道に歩みたい、心のうなづく道に歩みたいと願ふ心がまことに湧くのであつたが日常の自分から出る事はどうしても出來なかつた。

即ちかういふやうな事もずゐぶん自分を苦しめた一つであつた。人の目を引くやうな綺麗なリボンをかけるといふ事が一面に自分を喜ばせ一面に自分を責められるのであつた。綺麗なリボンはよく自分に似合つたので鏡を見ると自分の若い姿がそれ一つの爲に大きい渦になつて輝くやうにも思へる、自分はそれを喜んだ、然し其鏡の面を見つめてゐる目には、はつきり心の或るものが、見まいとしても見えて來る、それは冷かな心であつた、靜かな心であつた。

「ほんとうの信仰がないからこんな事が嬉しいのだ、どんなに言ひ譯をしたつて駄目だ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「先づ神を求め」てはゐない、たしかな事だ」
此心の瞳はあり〳〵と鏡の面にも寫るのであつた、然しそれ故に私は其リボンを取る事は出來なかつた。

引むしつてしまはなければならない筈だ！　と思つて私は唇をかむ、さうして生地のない、心の道の踏めない自分をはつきり見せられて嘲り責め苦しむ、しかもなほ其リボンを取る事は出來なかつた、それは又淋しい事であり且つつらい事であつた。

へ殺す勿れ」といふ事が自分をなやまし始めたのは丁度其翌年からの事で淺くなり深くなり表に浮び底にひそみ、メチヤ〳〵に自分をさいなみ、苦しめ、打ち壞し、よりどころを失なはせてしまつた第一の事であつた。其爲にしまひには聖書が讀めなくなつて、全く聖書を投げだして三四年をさへ過ごした、けれども其三四年の間とても少しの間も、一時間も此問題が心の底に縮まつて居る事を忘れた事はなかつた、再び聖書を讀むやうになつても此問題が片付いた譯ではなかつた。「私は愛の神を信じます」といふ言葉が空恐ろしくて口から出ない、自分が教會の牧師の信用を全く失ひ又自らも心苦しくなつて、且つは牧師が說く「愛」といふ意味が自分の胸に響かないので、全く教會を退いてしまつたのも此爲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

であつた。けれどもそこにもとより安息はなかつた、どうぞ之にほんとの理解がほしい、まことに愛の勝利を叫びたい「神は卽ち愛なればなり」と絕叫したい、「互に相愛すべし」といふ事に心からうなづきたいといふ願ひは此疑ひに伴なつて一日も自分をはなれた事はなかつた。其方がどうしても自分の行き度い道であつたから。

どうすれば眞實に萬物を愛す事が出來るだらうと考へて來る時、自分としての完全な解決はたゞ自分の死より外になかつた。自分が生きてゐる以上は木や草や鳥や獸の生命を絕つて自分を生かして行かなければならない、然し自分の生命が大切だとすれば愛の生活に入つたものには他のものゝ生命も同樣に重くなけてはならない、其重い生命を絕つて自分だけ生きてゐながらどうして其口に愛が說けやう、人間には或は說けるかもしれない、然し萬物にどうして愛が說けやう。

と言つてそれではさういふ事は出來ない事だ仕方がない事だと平氣になつてしまふ譯にはどうしてもゆかなかつた、どうにか仕なければならぬ、此心の通つて行く道をどうにか開かなければならぬと其事に深くなやまされた、さうしてそれに滿足な解決を與へるには自分を殺す事であつた、他の生物の生命の千萬を生かす爲に一つの生命、愛を意識した生命を殺す事であつた、けれどもさう考へて見ても自分を殺す事はどうしても出來ない事で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あつた、さうして自分はどうしても愛の生活に入る事は出來ないのだ、つまり萬物を眞心から愛して居ないのだと思はれて自分のやうなものは神の前に出る事の出來ないものだと思ひ定めて立ち塲のない苦しみに沈んだ。さうして同時に自分は世の宗敎家を笑ふ様になつた、佛敎の菜食も、外にどんな深い意味があるか、只普通聞かされるだけの事ならば要するに五十歩百歩の問題であると思はれる、さうしてもう自分のより處は一つもないと思つた自分を責めるけれどどうする事も出來ない。

然し此心に喜ばしい解決を與へてくれるものを求める心は深くも淋しい歩みを續けるのであつた。さうして世の名高い宗敎家にながい手紙を送つて見た事もあつた、然し其には返事さへよこされなかつた。名ばかり聞いてゐた、さる有名な牧師を尋ねて「私はどうか愛の生活に入りたいと願つてゐます、けれども此所に此通りの疑がある爲にどうしても神の信者を誓ふ事が出來ません、然し私はそれで滿足しては居ません、どうぞ敎へて下さい、これにどういふ解決を與へたらばいゝでせう」と自分の苦惱をうち明けて見たが其牧師の答は今憶えてゐる處のない程、其時の自分の苦惱に何の觸れる處もないもので、只憶えてゐるのは其牧師の口の臭さかつた事位なものである。

又或る牧師は印度のさる信者は地上の黴菌を自ら踏み殺さぬ爲供人に箒を以つて道を箒

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かせて後退るいふ事や、西洋の某將軍は幾度戰に出ても一回も曾て其劍を拔かなかつたといふ話などをしてくれた、然し自分には少しも贊成出來なかつた。前者については自分が殺す代りに人に殺させてそれで天國に入れると思ふのは非常な間違ひだと思ふし、後者とても自ら劍を振はないまでも自分の率いてゐる全軍は其命令に依つて戰つてゐるではないか、人を殺し町を奪つてゐるではないか、それでゐて事々しく言ひ立ててゐるなどは自分は嫌ひだと云つた。

けれども愛といふ一字は私の魂のなかにまで喰ひ入つてゐて、分らないと言つて其まゝにすませては置かなかつた、「神は卽ち愛なればなり」といふ言葉と「それ神は其生み給へる獨子を世にたもふ程に人を愛し給ふた」といふ言葉は不思議な神秘に私の魂の底を覗きこんでゐる。「善も惡も凡べては夢も同一だ、魂さへも夢のやうなものであり間違ひだらけのものである、されば吾人は唯、惡い間違ひのなかから美き間違ひを選ぶ才能を收得すれば足るといふやうな事を讀むとそこらが一番うなづける事であつた、然し其うなづく心に全生命を投げかける事は出來なかつた、そんなものではない、さうではない、深い生の意味！　宗敎の奥義、それを滅多な事に開け渡してはならない、自分をメチャ〳〵にしてしまふなよ！　と常に頑張つてゐる心があつた。

自分の心の底にこんな切なる思ひが絶えず蟠まつてゐるといふ事を知つてくれた人は幾人あらう、……けれどもそれは無理もない事だとも思ふ、自分には又一方に德川時代の末、あの文明の爛熟し切つた、もう腐つてぽたりと地に落ちる果物の匂ひに浸つて醉つてしまふやうな一面が備はつてゐるのである、靜に思へば或は自分がキリスト敎といふものを知らなかつたならば三味線を習ひ人情本に讀み更つて恍惚と死んでしまつたかも知れないとさへ思はれる處があるのだもの。

自分の育つた町は昔の宿場であつた、幼い頃の記憶にはまだ宿場の面影が深く、町の若者が正月の茶番に夢中になつたり、お祭の揃を氣にしたりしたもので、自分は小さい時から其村芝居を見に行く事や、お祭の騷ぎが大好きであつた。家のまわりはぐるりと藝者家で、夜の更けるまで三味線の音は絕へない、吉原雀も越後獅子も、いつか頭のなかに其調子が泌みこんで足拍子さへ、上手にとるやうになつてゐた、さうしてそれが私の血に觸れては、少しの無理もなくなつかしく溶けこんでゆく、冬になれば炬燵に這入つて、天保生れの祖母から昔語りをくりかへし〳〵聞される、それが又無上に面白く聞れるのであつた、自分が一方に愛讀おくあたはざる八笑人でも梅ごよみ、膝栗毛、浮世風呂など少しの無理もなく其人や其場面が直ぐに自分の血に觸れて其なかに浸つたやうになつてしまふのは、其

時代の人であつた祖母の話に育てられた爲であろう、祖母の使つた言葉には「やらつし」だの「あてこともねエ」だのといふ言葉があつた事を今本を讀んでは思ひ出す、祖母の凡べてはあの時代の空氣を直ぐに自分に知せてくれたのであつた、同時に私の血には確かにそれに共鳴してゆくものが有るのであつた。それは自分の內部に可成り力を以つてはびこつてゐる、例へば前の苦惱が自分の靈であるとすれば後の享樂的なものは自分の內であるとも言へる、それ程兩立した二大勢力（可笑しい言葉だけれどもよくあてはまると思ふ）であつて、それが負けず劣らずに步みを揃へて時に一方が一步出たり直ちに一方が乘り越したりして長い間を來たのであつた。さうして此方面のみが、どういふものか自分の表面に現れる、面白さのどん底まで行きつめてしまはなければ居られないやうなものがほかにも亦內にも深くあつて、人に對へば我れからまづよく話しよく笑ひ自分ながら驚く迄自分を制する事の出來ない程はしやいでしまふ事などあるのであつた。

一人の部屋にかへり一人の机に向ふ時、どのやうに淋しくひそかな淚を流したかしれない、幾度胸を打ち淚と共に祈りに咽んだかしれない、然しそこに一人の他人が現れる時、殆んど自ら覺めるより先きに、自分の態度はどこ迄も面白く話さうとするものが現れるのであつた、心ひそかに淋しさは決して消えも薄らぎもしないのに。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エピキユリアンといふ名を付けられた事もある、騒ぐ女だと嘲られた事もある、それはみんな分つてゐる、それはみんな苦笑して魂が甘んじて受けてゐる。放蕩の子を持つた親のやうな思ひである。

自分の魂は常に淋しくあつた、一方に魂それ自身の苦惱を持ち、一方には此苦笑を浮べて、思ひ深く無言の歩みを歩みつゝ、「もし此自分を眞から理解し、さうして此一切を愛してくれるものがあつたら」思ひあまつて魂のもらす言葉はこれであつた、其時こそ自分の眞實のラブは燃える。自ら自分の心に待ち望んでゐる自分の生命の火のやうな華のやうな星やうな、熱い靜かな神秘の深い、自分の魂が始めてラブと云ふ文字を許すべき偉いものに全身がなるのであると思つて曾てはひそかにそれを「人」の間に望んだ。然しそれは終ひにはたされなかつた、自分の魂は餘りに潔癖であり、餘りに絶對の事を人に望んだのであつた。それ故に終ひに自分は一人にも氣を許せなかつた、一人にも眞實底まで許せなかつたのであつた。

ラブと所謂世の人が言つて居るやうなものは、自分がまだ十代の頃に唯花のやうに愛されたのに、純な心から伴奏を奏でるやうなラブをした事があつたゞけで、それは自ら覺め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て自分の足どりで歩んだものではなかつた、と同時に先方も充分な理解があつてそれから出立した確然たるラブでは決してなかつた、唯音樂を愛するやうに愛したに過ぎないのであつた。——其他の事は自分としてとり立てる處のない程のものである、殊に文學方面の人に對しては心が許せなかつた、一部の人たちの甘い言葉を自分の一方の心は面白がつて聞き、蝶のやうに戯れてゆくのであつたけれど、自分の魂はどんな時にも肉に沈まなかつた、奧底にいつも無言で、ただ淋しく輝いてゐるのであつた。

　けれどもそれは私の魂が凡べてそれらの人まで嫌つてゐる爲ではなかつた、寧ろ自分は自分を誠に解してくれる唯一人の人は矢張此なかのみにあると空だのみのやうに漠然と、然し強く信じて居るのであつた、たゞ魂の淋しさと、其求めを自分から外に現す事をしなかつた。（自分はさういふ事の出來ない性質である故）、然し此心の瞳は深く、寄つて來る人々に無言のまゝ凝視入る、さうしてそこに失望がかへり、魂は再び寂寥に閉されて無言のまゝ孤獨の瞳をふせるのであつた。此時一方の心が時を得顔にやつて來て時にはどこまで行き極めるかと思ふ私の道化た芝居が始まるのである、それはほんとに不謙遜な、たゞ思ふさま可笑しく時を過ごしてゆくやうな……。然しこれさてもなほ私の全身を埋めこんで了ふ事は出來ないのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分は自分の魂を意識するやうになつてからラブのエクスタシーに自分の魂が入る事が出來なかつた事を斷言する、それは誠に願つてゐる事であり欲してゐる事であるに拘らずつひにエクスタシーに入る事が出來なかつたのである、自分が讀書に耽ける時だけの全身をあげて打ち込む事すら出來なかつたのである。

それはあへて自分の知つてゐる文學者の凡べてが甘い言葉を弄する人達ばかりであるといふのではない、むしろこれらの人達は何の方面にもあるほんの一部のものにすぎないと言つた方がよい、さうして又或る一部の人々は各、自己に對して自分などの及ばぬ立派な自己を持つて居られる人達である、自分は心から尊敬してゐる人もある、然しそれゞ私を理解してくれ、しかも私の全身を愛じてくれるといふ事とは自ら別問題である、同時に私の性質として自分をうち割つて自分の全部を人に示すといふやうな事の出來ない生れからなので只時を待ち人を待つてゐるといふ、遠い(?)自然にまかせてゐるといつたやうな間に時がたつてゆくのであつた。

とは言へ又それは淋しい事であつた、そうして折々は深い勞れに落ちた、自分の待ち望んでゐるものはもはや理想の部に屬するもので當低「人」に求めらるべきものではないと思ふやうになつた、それと同時に自分は文學に縁の遠い人たちの間に自分の見落してゐた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

喜ばしいものを認めるやうになつた。

之等の人は言葉少なである、下手である、けれども所々に白銀のやうな純なものがあり、理解はないけれど無茶のなかに砂金のやうな眞實の光つてゐるのをより深く知つた。無智無理解にもあれ、手のかへしやう一つにも自分をおいて人を愛するといふやうな眞實のある處に暖さを感じさせられる、たゞ理解のない爲に、自分の全部を語る事は出來ないけれど自分はこれらの人とは割合に暖く親しむ事が出來た。

「死」といふ事については、幼い頃から最も深く眞面目に考へさせられた。さうして年を重ねるに從つて漠然とした恐れといふよりも病的な發作に襲はれる程死の恐怖は身内に喰ひ入つて來るのであつた。

十五六の頃牧師から聞された死後の審判といふ事の言ふに言はれぬ恐れ――それにはむしろ幼い頃祖母に聞かされた佛敎の地獄の恐怖が其まゝ映つたのであつた――が年をとつて來るに從つて馬鹿々々しくも思はれ、どう考へて見てもさういふ事はありさうにも思はれないに拘らず、なほ自分の魂が一度打たれたどん底までの恐れは忘れる事も打ち消す事も出來ないのであつた。「そんな事はない」と思ふのは私の頭腦から出る言葉で自分の血

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は迷信的に、盲目に、けれど嚴にそれを否定するのであつた。それと同時に又死といふもの丶寂滅に堪えられない心であつた、どんなに恐れまいとしても、どんなに冷に考へても其永遠の不可解な寂暗に閉されてしまふ死の部に這入るといふ事は極度の恐れであり厭はしさであつた。どうか死にたくないと思へば思ふ程、死は恐ろしい瞳をちよい〳〵あげて、隙きあらばといふやうに身がまへてゐるやうな氣がしてならない、殊に自分の父が自分たち六人の子供を殘して突然、實に時計の振子が不意に止まつた時のやうにアッといふ間に心臓痲痺を起してあへなくなつてから自然は決して愛を以つて人間を取りあつかつて居るのではない、或る、自分には不可解な目的を遂げる爲に、十束一拘に、或は彫刻師が土を思ひのまゝに加へたり、削つたりするやうに、ぐん〳〵とすさまじい力を以つて自己の目的を遂げてゆくので、そこにちつと人間、或は生物との意識的に相違ふた愛はないのであるとさへ思はれる、さうしてそれが花の咲くのを見、且つは萎むのを見てもいかにも事實に思はれるのであつた。自分の家の事情から考へて、どうしても死んではならない父が死んだといふ事は、自分が愛を愛をと求め入る心で自然の無言に聞き入つてゆかうとする心をメチヤ〳〵に打ち壞してしまふのであつた、いくら自分だけで暖い小さい巢を造つてゐても外から來る運命には勝たれないと思ふと恐れと失望は用捨なく身内に荒れ狂ふのであ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。メーテルリンクの「内部」に骨のずいまでも打たれ、ヘロデの小兒虐殺に血も凍るかと思はれ、自分にはまだする事があるんだといふ心が石に噛り付いても生てゐやうと絶望のなかにひざまづいて祈る、けれどもそれは大風の前の木の葉のやうに、無慘にも不時の死といふ言葉に引ちぎられてしまふのであつた。

終ひにそれは自分の病氣のやうになつてしまつた。本を讀んで居る時、裁縫をしてゐる時、或は夜中に一人目を覺した時、ふとたゞならぬ思ひが迫つて、もう死は紙一枚の直ぐそこに來て居るやうな氣がする、ふり向く事も出來ない直ぐ自分の脊に自分を睨み付けてゐると思ふと足の裏からピク〳〵と痙攣が走り始めて耐えても〳〵自分でどうする事も出來ない力に襲はれるやうに、やがて全身は烈しい痙攣に止め度もなく震つて手足は氷のやうに冷えてしまふ、こんな事で夜中に醫者を招く事も幾度かあるやうになつた。かういふ病的な苦惱に自分は一年も日を送つた。

自分の苦惱はつひにクライマックスに達した、どうか此苦惱からのがれたい、安全の一呼吸がしたいといふ念は、絶望の底から唸くやうにもれて來るのであつた。

某年の冬の一日、自分は陰鬱な心を抱いて一人淋しく○○の原に來た。草は枯れた色に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一面に見渡され處々に立つてゐる木々が葉のない枝を寒さうに見せてゐる、あたりは澄み切つて底寒い風が音もなく吹いてゐるのであつた。自分の影は長く向ふの丘の上までも投げられてある、口を噤んだまゝうつむいて彼方此方と歩き廻つたあげくに丘にのぼつて腰をおろした。眞直ぐに向ふを見ると今丁度太陽がだん／＼と山の彼方へ落ちやうとしてゐる、空の雲は冷え々々と靜かに、只其西の山並のあたりがサンセットの沈痛な色に塗られてゐるのであつた、さうして其落ちかゝつた太陽の巨大さに自分はひどく驚かされた。其太陽はあだかも生物の如く、したゝるやうに赤く且つ巨大に神の如き威嚴を以つて落ちてゆくのであつた。そうして其威嚴が秋の全身を徹して思はず崇高の感を湧かさせ其ものゝ前に頭をさげさせられたのであつた。自分が曾て寫眞版で見た、ブレークの畫の一つであつた、カインがアベルを殺し其罪に戰きつゝ兩親と神の目から逃れんとして絶望の足どりになほ走りつゝ去る處、一方には人間第一の死の、天地間は横はつてゐるそばに彼の父母が魂の底から驚きと悲しみに打たれ震えてゐる、脊後に原始の山が聳ゑ、そこに巨大な太陽は威權を以つて悲蒼なる其一日を閉すべく落ちかゝつてゐる、其神秘なる權威に深い威慾を與へられた彼の太陽を今にこゝに見るやうに思はれたのであつた。

自分の心の暗瞻はクライマックスに達して次ぎへと進んだ、冬の終りの野の霜を割つて

痛ましいものゝ青が凍えながらも見られるやうに自分の心は暗瞻から一歩を自然に運んだのであつた。

一切は神の御手にある、生も死も善も惡も凡べては神の御手に！

喜びも悲しみも神の權威に歸す、自分はたゞ與へられた生命に喰ひ入つて行けばよい、分らないものはまだ分らないのである、分らないからとてそこに絕望してゐるのは間違つてゐた、思へば自分は算盤で割り出すやうに無限のものに答を求めてゐた、權威をものさしではかつてゐたのであつたといふ考へが力强く湧いて來て、しかもそれが今まで頭でばかり答へを出した自分の血がちつともまじつて行かなかつた考へとは不思議に全々異つた力强い眞實の諾きとなつた。

何にも分らない、然し分らぬ故にとて投げ出して望絕すな。如何なる時、いかなる事にも。此まゝ自分は死んでも一切を神に歸せよ、それが自分に良くても惡くても自分の嘴を入れる處はない、神の萬考に、權威に頭を下げよ、其上で如何なる事でも求めてゆけ！

自分の心にはじめて微かな暖い光を感じた。それは丁度凍死したものが漸く甦生しかけた時の心持が思はれるやうに、ぼんやりと意外に、然し確かな光を認めたのであつた。

太陽はだん〴〵と沈んで行つた自分は時の翼を聞くやうな心で眞面目な短い默祈をした

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

太陽が全く沈んでしまふと非常な淋しさが野に動いた、自分はまだ其まゝ心の奥へ奥へと尋ねて入つた、それでもなほ此聲を打ち消して立つ聲は一つもなかつた。自分はしつかりした歩みを以つて家に歸つた。

それから少しづゝ自分の心に平靜が歸つて來、心の芽は少しづゝ凍えたなかゝら暖められ成長されてゆくやうになりはじめた。

自分にはまだ前と同じやうな疑があり矛盾があり恐れがある。神は即ち愛なればなりといふ言葉、殺す勿れといふ言葉に對して全部が解決されてはゐない。又自分の一面の遊蕩染みたやうな處も根を斷ちはしない、死については殊に充分な恐怖を持ち同時に死ぬのはいやだとも思つてゐる前のやうな自分が引つゝいてゐる。然し其なかに、其いづれもよりも優れた處……それらの上に神を思ひ神にすがり神に服從してゐるものがあるやうになつた。即ち愛といふものを筋だてゝ説明する事は出來ないが、自分はたしかに愛されてゐる事を割々感じる、そして此自分さへ愛されてゐるのだもの、どんな人でも各に歸れば愛されない譯はないと思々し、又「殺すなかれ」といふ事も矛盾があり不可解であるけれど、考へずに今一度自然に瞳を向けて眺め入る時、そこに……生き死にのあるといふ事に量り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

知られぬハーモニーを感じる。今終りの審判が開かれたとしても自分は以前のやうに慌てふためき身の置き處も知らなくはないのであらう。

自分はまだ充分不純であり、心で迷ひながらもたま〳〵嘘をつく事もあるし全部緊張した心でする行爲ばかりではない處も澤山にある、然し自分は今それらを一度に改めてしまへないのである（しまはないのではない）今の自分がやつぱり精一杯である、然しこれから漸々淨められてゆく事を信じてゐる、それだから其まゝを正直に人にお話しして惡い處は言つて頂いて自分でも或る程と思つても見たい氣がしてゐる。

神は必ず私の全身を地獄の火に投げ入れはなさるまいといふ事が信じられる、目は抜かれるかもしれない、手は切られるかも知れない、然し私の「全身」を決して地獄の火に投げ入れ給はぬだろうと思はれる。

凍えた身が漸々に暖められるやうに神に向つてだん〳〵心が暖められてゆく、恐ろしいばかりではなくなつて來た。

ともすると心にすまない事が出來て此信仰をそつちのけに、神は慘酷だ、否人間の事などと特別に智情意のあるものとして扱かつてはゐないんだといふ心が狂い出して絶望に沈む時のないではない、然し其萎えた頭をもたげ且つ神を呼ばはれるやうに神は私に望み給ふ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自ら罪に沈む時も其悲しみの底から呼ばはれば神は御顔を向けてくださる。

重病人など見る時に又ヒシ〳〵と死の怖ろしさは寄せて來る、然し猶はそれにも此信仰はつひに打ち克つ事が出來た。自分の眞實の歩みはこれからである、冬の暗瞻は終りに近づいた。自分は漸く暗黒を拔け出した。私はもう神に離れる事はないのであらう、愚者である自分はまだ幾度も愚の道を歩むであろうが……暖めくれつゝある生命の全〳〵冷える事を思ふ事は出來ない。生命の死を思ふ事は出來ない。

二羽の雀は一錢にて得るに非ずや然るに神に於ては其一つをも忘れ給はず。

（キリストの聖言）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四篇―岡田ゆき

兄妹の悲しみ。

兄。　――年の頃二十二三。何處やら子供じみた男。

妹。　――二十位ひ。目に純な輝きを持つてる女。

兄。　もう泣くのはお止め。いくら泣いたつて一度墓穴へ入つてしまつたものは、生きる理由がないんだから。

妹。　えゝ………眞實にさうねえ。死ぬ、ものにとつて、死は、最も、大きい幸福なんですわ。私達と仲の好かつた弟が、人生の最大幸福を握つたんだと思へば、諦めもつきますわねえ。

兄。　さうだ。死は人生の最大幸福なんだ。けれど、生き殘つた、親身の者にとつては、何處迄も悲しい、いたましいものだよ。然し、僕等は此の大きな悲哀に、うち勝たねばならないんだ。彼の死は悲しいに違ひないが、もう何んて、云つても歸らない人だもの。それがために、生きねばならぬ僕等が、大切な自己を忘れてはならないんだよ。

妹。　さうですわ。私達は自分程大事なものはないんですからねえ。

兄。僕等は目の前に、どんな事が出來てても、決して、動搖してはいけないんだよ。そして、いかな場合でも、自分は第一義でありたいものだ。眞面目に自分と云ふものを考へなくてはいけない。彼が死んだ時、澤山來て呉れた人達の中で、幾人心から悔みを云つて呉れた人があらうか。心から泣いて呉れたものが幾人あらうか。皆世間のつきあひとか、義理などのために、來た人ばかりだと云つても、好い位ひぢやないか。

妹。私達だつて他人の死には、それ程心を動かされやしませんものねえ。けれど彼は未だ生きて居るのですわ。私達總べて、彼を知つてる人の心の内にね。私達が生きてる内は生きてるのですよねえ。兄様さうでせう。

兄。あゝさうだねえ。僕等の心に生きる彼は、いつ迄も十五の少年なんだ。決して、年もとらないし、變りはしない、若さに輝いた少年なんだよ。

妹。私達は棺の中に横たはつてる、彼を思ふのは止しませう。元氣な笑ひに充ち、充ちた彼を思ひませうねえ。兄様。

兄。あゝ、それが好いよ。

妹。ほんとうに、さうしませう。

終り。

電車を待つ間。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

芝居がへりの若い男。

連れの若い女。

女。何んしろ、これだけの人が乗るんだから、一臺や二臺のうちには乗れやしませんね。

男。もう、どうせお宿りは知れてるから、ゆつくり行くさ。

女。そりやさうだけれど。――春芝居とは云ひながらかなりな入りでしたね。

男。人もかなり入つたが、狂言も面白かつたなあ。一番どの幕が好いと思つたかい。

女。さうねえ。私は、「なこその關」が面白かつたわ、殊に序幕が好ふ御座んしたよ。のどかな氣分がよく出てましたわ。誰れやらの句に、「櫻かざして、今日も暮しつ。」つて、云ふ、天上人の生活をうたつたのがありましたつけ。眞實に、あんなだつたんでせうねえ。

男。けれどあの芝居は、劇そのものよりも、背景の方が、ぴつたり、僕等の心に合つた樣に思はれたよ。さうは思はないか。

女。さうねえ。鶯が鳴いて、築地の塀に春の日が照つて、柳の新芽が青かつたのなんか、ほんとうに、好かつたわ。

男。「お園六三」もわりに好かつたけれど、お園のこしらへが馬鹿に淋しかつたな。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女。ええ、だつて、ねえ、白い地色の著物に、襦袢の襟が水色なんですもの。色のうつりがあんまり淡いのよ。

男。それに、此の頃○○は大變艶が失せたね。

女。さうおつしやればさうねえ。二三年前迄は、内から充溢する樣な若さが美しさに、伴つて居ましたわ。

男。○○だつて、人間なんだから、年と共に、褪せてゆくのも、やむをえないが、舞臺に立つ人が、だん／＼と若さを失つて行くのはいたまし事だな。

女。さうねえ。まるでお人形さんに對する樣　冷い美しさですね。どうしても魅力がなくなりましたわ。見る舞臺が物足りなく思はれるのはどうしたものでせう。

男。今の樣な冷い美しさぢや觀客をひきつける事が出來ないんだよ。電車は未だ來ないの。

女。え、未だよ、けど今度來るのには乘れてよ。

男。今度のには乘らうよ。こんなに待たされて降らないで、幸ひだね。

女。ほんとうにねえ。あゝ星が澤山見えること。

男。何んだか、いつもより、よく星が見える樣な氣がするね。

女。「地下室に居ても、おれは星の存在を感じるんだ。」ぢやないの。

男。「あゝ呪ふべき星よ。」か。「星の世界」はよかつたね。考へさせられたな。

女。さうだつてねえ。

男。さうかい。乗らうよ。（終り）

二人の女。

女の一。――若いけれど、何んとなく落ちついた様子で、いかにも冷やかな美人。

女の二。――一の女よりはるかに、華美なみなり。年頃は同じ位ひであるが、何處やら、それ者上りらしい、こなしがある。

女の一。 まあ、それでもよく、此家がおわかりになつてねえ。眞實に思ひがけませんでしたわ。

女の二。私ねえ、實は今日貴女をおたづねしやうとは、思はなかつたんですが、少しばかり、いやな事があつて、氣がいらついて、たまらないんでせう。ふつと、私は貴女の落ちついた、お顔を心に浮べたら急にお目にかゝりたくて、一目散に上つたのですよ。

女の一。 さうですの。でも貴女はいつも元氣でいらつしやるわね。貴女には一日、一日が面白くてたまらない様に、見えますわ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の二。　さう見えて、貴女には。私は毎日こうして、面白さうにしてますが、心にいやな事があるからつて、くよくよしてたら、やりきれませんもの。それよりも面白おかしくする方が、怜悧者ですよ。こうは思ふのですが、なかなかさういかないんです。（苦笑する。）

女の一。　貴女、何かお習ひなすつたら、いくらが、お氣がまぎれてよろしいでせう。

女の二。　私も何か習ひ始めてみたら、私の半生のいやな生活の夢も忘れられるかと思ふ事もあるのですけれど、私だつて、もう年をとり過ぎてますもの。

女の一。　何んの貴女、ものを習ふのに、年に制限があるもですか。幾つになつたつて、知らない事を覺えるに、不思議はないぢやありませんか。それに貴女はお若いのですもの。私達にとつては、此の若さがどんなに、尊いか知れませんわ。

女の二。　貴女のおつしやる通りですわ。明日からでも私何か始めたくなりましたわ。貴女と小學校に居た頃が一番好ふ御座居ましたねえ。未だ十二位ひの頃でしたわ。貴女方は又あれから、他の學校にいらつしやつたのに、私ばかりは、親のためとは云へ、何故あんな赤い灯の町へ入つて、行つたのでせう。今更ら口惜しい樣な、恨めしい氣がするんですよ。けれど、もう取返しはつかないわ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の一。　然し貴女もう過去は仕方がありませんわ。運命なんですよ。私が學校へ行つて、勉强したのも、貴女があの樣な商賣をなさる樣になつたのも、皆、人間の力ではどうする事も出來ない運命なのですわ。ねえ、今日から何かお讀みなすつたらいかゞ。私の持つてる本で、お讀みになりたいものが、お有りでしたら、いつでもお貸ししてよ。

女の二。　ありがたう。私貴女のお言葉の通りにしませう。

女の一。　貴女がさう云つて下さるとうれしいのよ。私はこう思ひますの。人間の美と云ふものは、生れつきは兎に角、學問さへすれば、或る程度迄美しさが生れて來ますよ。其の美は、なか、なか、たやすく得る事が出來ない、智的な美しさですの。世の中に薄つぺらな美しさの人は澤山ありますけれど、智的な美を持つて居るのは小數の人にかぎられてますわ。人間は頭を作らねばなりませんよ。私達は尊い美が欲しいではありませんか。貴女はさうはお思ひにならないこと。

女の二。　私にはとても駄目だわ。いくらそんな尊い美しさが欲しいと思つても得られませんわ。

女の一。　そんな事はないと思ふわ。貴女にしろ、私にしろ、誰れでも、努力次第で得られると信じます。お互ひに勉强しませうよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の二。　えゝ、私は生れ變つた氣で明日からやりますわ。そして、過去を忘れる樣にしますわ。

女の一。　直ぐにお忘れなさる事は無理かも知れないけれど、時が忘れさせて呉れますよ、きつと。

女の二。　さうでせうねえ。私何んだか、幼い昔にかへつた樣な氣になりましたよ。

女の一。　私もそんな氣になつてきましたわ。二人きりで、よく歩きまわつた昔の日の樣に。少し散歩してみませうか。

女の二。　えゝ、未だ日が高いから行きませう。そして歩きながらお話し、しませう。

女の一。　それぢや行きませう。

終り。

ある夫婦

良人。――あの富家の後繼にて世なれた青年。

新妻。――二十二三位ひ。あまり容貌は美しくはないが丈がスラリとして居る。

良人。　お前が此處へ來てから、かなりもう日がたつたかね。

新妻。　えゝ、私が始めて、此家の人になりました時は、新らしい葉が、初夏の太陽の光りに、いき／＼と輝いて居た頃で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すから、今からもう四月程前になりますわ。

良人。 もうさうなるかなあ。待たぬ日は早くたつものだ。

新妻。 ほんとうにさうですねえ。私、昨日の様に思はれますよ。貴方にお目にかゝつたのさへも。

良人。 さうかい。然し、お前は、來ない前に、おれをどんな人間だと思つて居たかい。

新妻。 私は今と考へも違つてましたわ。けれど、それは勿論世間の噂とか、新聞の記事で判斷したのに、違ひないのですが、おそろしい、うつり氣な、生涯を共にすなどゝは、とても、もつてのほかな方だと思つてましたわ。貴方お怒りなすつてはいやよ。私眞實の事を申上げて居るのですから。

良人。（微笑して、）ちやんと聞いてるよ。怒りやしない。大丈夫だ。そんな事心配するのは無用だよ。誰れだつて、「現代遊蕩兒」なんて、新聞記事を見て、さう思ふのは當然の事だよ。

新妻。 けれど、それは來る前の考へなんですわ。私今はそんな事思つてやしませんよ。私は此方へ來てから、新聞の記事とか、人の噂などゝ云ふものは、あてになるもんぢやないと云ふ事を確かめましたの。そして私は自分を信じ、貴方を信じて、日を送らねばならないと、思ひ定め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのです。

良人。　ほんとうに、お前がさう考へて居られゝば二人は幸福だよ。自分より他に、自分を眞に解するものはありやしないんだもの。

新妻。　私は二人の幸福などゝ云ふものは、他人が何んと云つたつて、二人さへ現在の生活に滿足して居れば、それで好いのだと思ひますよ。ねえ貴方、世間の人達は貴方の富を羨む心から、又私の身の上を妬む心から、必ず二人の結婚は破れるなどゝ、思ひもよらない噂をするのですわ。貴方きつとさうだと、私は思ふのですよ。

良人。　お前が云ふ通りだよ。然し、お前は私と結婚した事を後悔する樣な事はなからうな。

新妻。　えゝ、貴方、そんな事おつしやるまでもありませんよ。私はこう考へて居たのですね、來る前に。ねえ、貴方、人間は男でも、女でも、結婚する迄には、必ず其の夫となり、妻となるべき人の他に、愛した人があるに、違ひない。私もないとは云ひませんわ。けれども、それは精神的な愛を云ふのですわ。そして、私のは新聞などで書かれなかつたけれども、事實においては、書かれた貴方と同一ですもの。貴方ばかり、私と違つたものゝ樣には、考へられなかつたのですわ。

良人。　それなら、何處迄も二人は幸福だ

ね。

新姉。　えゝ、さうですとも、幸福は二人の心に、根強く、はびこつてゐるのですわねえ、貴方。

二人接吻する。

終り。

大正四、一、二八。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眞暗にありて——三ケ島葭

——巣鴨にて——

我をいとめづると深く憎めるといづれも我を知る人ならん
投げられしものとやうやく身に泌みしその一つこそおのれなりけれ
わが力ここに盡きぬと泣くよりもいぶせし君のかがやけるさま
やがてわがよろこぶものも泣くものも無き日來らん死を待たずとも
甲斐なしと思ひたちつつ恨みえず忘れあたはぬおのれなりけり
あらがふは同じ運命に歎くべき人の唯一の道とおもへど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

拒まれし心と知らずはしけやし疲れし人をいたはりにけり

かにかくに我の思ふを拒む人あらずばいかに悲しからまし

親も無き家も無き子とひとすぢに思ひ入りしを砕かれにけり

みづからを巷の塵と思ひつつなほ捨てがたきおのれなるかな

待つ間なくうつし相見るはかなさよ我や今より何を待つべき

みづからに克ちがたかりし心今何とたたかふなやみなるらん

世のつねのせはしさとさへあきらめぬ誰がかばかりにせばめたる世ぞ

支那に來しここちしながら監獄の門のかたへの破屋に入る

いづくよりも手紙は來ず人は來ずやゆふべ歸ればかく問ふ人よ

みづからが見るもけうときこの身なりいのちとられて投げられてまし

なほ生きてありける身かとおどろきぬ朝の厨にうごめけるわれ

あぢきなしはたかひなしと思ふこの針仕事にも心まぎるる

恨みてもあらましものをみづからのあやまれるをば知りしさびしさ

わが心まだしづまらず目を閉ぢてあれば家内の鳴りてくるめく

身は花のもとに來れどつまさきの泥に心のとらはるるわれ

かなしさにまた別れんと言ふをさへわがくりごとと思はざるかな

おろそかに思ふ心を責めながら死身となるを恥ぢにけるかな

おのれ今危ぶむことのかにかくにうれしきはそも何によれるぞ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おのれより打ち出づるさへ若き日はおのづからなる力なりけん

空にさへ壓さるる我か美しと思へどこころ土にをどらず

戀ゆゑにややときめきしそのかみの我のみをなほ我と思へる

この日こそまことに君がこころにもなれる身と知りひややかにある

おほらかにはなればなれにゆくさまを見んと思へばなつかしきかな

わがこころ餓に走るもあはなり飽かばたちまちしどけなからん

うつろもてうつろを抱くここちしてひとりあふぎぬ春の青ぞら

われもまた劣らぬねがひかなしみを抱けるなれどすべなかりけり

旬日の友――菅原初

Pは誰からもよく愛せられました。春のやうな柔かい彼女の心と、頤顎から頸にかけて美しい、いかにも女らしい感じは實際愛さねばおけないのです。で之迄にもPを愛した男も隨分ありました。が物に執着して仕舞ことの出來ないPは、むしろ向から執拗に出られても、烈しく愛されても、淡白なPの愛は、之と調和することが出來ず、いつも悲しい物別れとなるそうです。之からの話も亦そうなんです。Pは私の大切な友です。恰度この話を私にする前之をぶちまいてしまうのは、對手のKに對してすまないとも思ふが、自分を物語つて行くのに何も別に差支もあるまいと云つて話し出しました。例のように一向力のない話です。眞劍か、遊戲であつたか自分にも解りませんけれども、只「戯」であつたといふこと丈は、どんなことでも立派に云へると申します。私は、再現に便利のため、之からPのことを「私」として話してゆきます。

私がTと云ふ友の家で、Tの紹介で恰度そこに來合せた、Kといふ人に會つてから、只

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の一度でその人が好きになりました。

之迄Ｋといふ人の噂は……一寸變つた人なんですから學級（クラスメイト）の中で人氣者の一人だつたそうです。三年前に卒業した私の耳にさへ這入つた位ですもの、でもどうせ物好な人達が物好にしたのですから下らないことばかりでした。噂ばかりじやありません、私はその以前私の友のＴの宅でその人の寫眞も見ました。それは何かの紀念撮影で、三段に並んだ多くて顔の中に交つたその人の影は別に變つても、目立つても見えません、全く當前の影でした。が會つて見て初めて成程と思ひました。私の會つたのは、眞夏の日盛でしたがその人は黑つぽい銘仙の單衣を着、灰色の袴を心地下につけていました。黑い髮を無雜作に束ねて、こうじつと見詰る所はどう見ても男性的な所がありましてね、私も初めは隨分妙な女だと思ひました。が話してゆく内に、その氣障が氣障でなくなつて仕舞ました。

私は會つた時、自我の强い女だと直ぐ思ひました。でも强い彼女の心にぶち込んだ所に興味と、張合とがありました。私の血は頻にＫに向つて動き初めます。悉皆、Ｋに引付られて仕舞つた私は、この私の自然に向つて進んでゆかうと思ました。

その日Ｋと一緒にＴの家を出た私は、Ｋに之から遊びに來てもいゝかと聞きました。Ｋは「えゝいらつしやい」と云つて吳れました。小川町で本鄉の方へ歸つてゆくＫを見送つ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たら、また會ふあすが只管待たれました。

その夜私は最後便で一枚の繪端書が來ました。アカシャの樹の下で、赤い衣の女が踊つてゐる素描のものでした。私は裏を返してKの名を見ました。

いつの日から、あなたに會ひたいと思つていたあなたに、けふ計ずも會ふことが出來たことを嬉しく思ます。今ハレット社の前を通つて一寸面白いと思ひましたから、あなたのお目にかけます。あすはきつとお待しています。直ぐ街から出したらしく、鉛筆でかいてありました。私はいつまでも、いつ迄も眺め入りました。

翌日私は初めてKの下宿を訪ねました。本郷三丁目で電車を捨てゝ××の坂を少し上ると直ぐ解りました。

Kは昨日より一層快活な調子で迎へました。南と東とに窓のある室は、風通のいゝ明るい間でした。私はさらさら吹き上げて來る涼しい風の中でKと心地よく話しました。そして今坂を上つて來た時の汗もすつかり忘れて仕舞ました。南の窓には中庭から生へた、無花果の幹の上半丈けが見えています。机の上には書學の稿本が積んでありました『もう檢定試驗も追々でしよう』『ええこの下旬です』『お忙いでしよう』『いゝえ』とKはいかにも落

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

付いています。暫くしてから『實は方便なんですよ、國へ歸るのがいやだから』『あなたも隨分親孝行ね』と云ますとKは默つて苦笑しました。
『水菓子ならいゝでしよう、甘いものでないから』と梨をすゝめてこんなことを云ます。
『どうしてご存じです』
『この間Nさんの文章で見ました』
私はふとこの間、Nといふ私の友が或雜誌に私のことをかいたのを思出した。それはあく迄Nの主觀にすぎぬものでしたが、私にはむしろ不愉快なものでした。で私は言ひました。
『Nさんもどうがしていますね、あんなことをあんな雜誌にかいて、下らないじやありませんか、ね、よせばいゝのに』
私は頻りによせばいゝのにを繰返しました。Kは默つて之を聞いてゐましたが、その顏には或愉快らしい表情が見えました。
水彩で戯に描つた樣な大きな繪が唐紙にピンで止めてありました。淸い海を背景に海の女が寢そべつて海を眺めているのが紙一ぱへに描いてあります。Kは唐紙に向き乍ら『L

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のいたづらなんですよ、Lの』と云ひました。

『Lさんですか、Lさんなら私も知つてゐる』

私は机の下に赤い肘付を見付けて『あれはどうしたんです、もらつたのですか』Kは只『えゝ』と答へました。私は『目立ちますね、あの赤い色は』と云ました。Kはそれには返事しないで、マッチをすりました。そしてさも悠長に敷島を輪に吹き乍ら『目立ちますかね、そうでもないでしよう。あんなものはそこらじゆうに轉つてゐるじやありませんか』といかにも平凡事らしく云ふのです。私は默つてKをみつめていましたが、『いゝと云つていゝか、惡いといつていゝか知らないけれどあなたには非常に引付ける所がありますよ』

Kは默つて煙草を、くすべて居ました。

その第二日はこんな風で別れました。

この頃、私は日が西に傾く頃になると、どうしても家に落付ていられなくなりました。日頃は面白いと思つて聞いてゐる從兄の話さへ遠くの方で聞いてゐる樣な氣がします。東京の從兄の家でやるつもりで國からもつてきた私の仕事も、こうしてKと接觸してゆく內

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は何も出來ない、今暫は何もしないつもりにしました。Kと別れた翌日の夕方私はKから又一枚のハガキを受けました、ハガキは散歩はいかがと誘つています、私は淡い裝をして直ぐ出かけました。

私は約束の時間に、約束の本郷三丁目迄行きました。暑い日が落ちてやつと涼しい風の吹き出した街の上は、白い浴衣の人で一ぱいでした。私はその雜踏の中に容易にKを見出すことが出來ました。白い浴衣の中に交る彼女の銘仙が黒かつたからです。Kは未だ私に氣が付かないらしく、ポイントマンの手に動く赤い旗と、青い旗とを見つめて居ました。その時私はKの顏の邊に寂しい影を認めました。

私はわざとKの目に立たない樣にして、故意にKの前に立ちました。Kは『あら』と云ましたが、その時はもうそんな影はKの顏のどこにも見えませんでした。

『どこへ行きます』

『どこにでも』

と私は微笑しました。

『少し歩むことにしますか』

どうでもと云ふ私の手を引いてKは、レールを突切つて、金康の前まできました。でも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二人ともまだ何處へ行くとも知りません。そこの窓飾（ショーウインド）には華かな緋鹿子や、金銀細工の美しい純日本式の櫛が、優しく輝いていました。Kはウインドを覗き込み乍ら、

『ぢや何處にでも、私の行く所にして呉れますか』

『えゝ、どこへでも、けふはあなたの、おつしやる通りになりませう』

Kはなほウインドを覗いています。私はKの横顔をつくづく眺めました。眉の邊で一寸高くなつている性的特徴は、どう見ても男性的です。實は昨日Kの宅で一寸そのことに就て私は露骨な問をしました。するとKは、

『ほんのしるし丈あつたが、この三四ヶ月は、まるで無い』と答へました。Kの顔は整つて居ましたが、目立たない顔でした。どこかに寂し味のある、けれどいゝ顔、大そう味のある顔だと思ひました。何にも知らないKは無心に覗いていましたが、

『あなたに似合そうな櫛ですね』

と云ました。そして自分は、女の髪形や、髪の道具等に趣味を持つていると云ました、私は丸で、男が女の髪を許してゐるのを傍から聞く樣な氣がしました。私は云ました。

『若い人の丸髷は可愛いゝものですね、でも髷結ぶ心は私嫌ひですよ、何だか囚はれて、仕舞つたようで』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『でも自分の女に髷、結はしている男は愉快でしよう』

私は妙な不愉快な氣がしてKの顏を見ました。Kは落付いて知らん顏してゐます。

Kはそこから、今出ようとする三田行をつらまへました。そして空席の一つを私の爲めに指しました。私は素直にそこにかけました。私の隣りにはまだ一人かける丈の餘地がありました。私はKをそこに來てもろうつもりで、少し席をずりました。するとKは向ふの席にかけて仕舞ました。そして向側から恰も訴をするかの樣に、私の顏を見つめました。私には出來る丈Kの視線から逃げ樣としました。

馬場前迄きたとき帝劇の花電氣が夜の空に輝いていました私はKにこゝで降りませんかと誘ひますと、Kは一瞥したまゝ動きません。そして日比谷にきて、降りませうと云ました。

日比谷の植込の中を歩き乍ら、Kは私に『芝居が見たかつたでしよう』と云ます、私は只前を通つたから尋ねて見たのだと云ますと、Kは例の寂しい顏をしました。そして云ました。

『私は芝居を見樣とは思ひません。ね、始終ほんとうの芝居を見せつけられてゐるんですもの、それ丈でもう澤山です』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

　Ｋの調子は少し興奮して居ました。私はＫが劇と、生とを丸で混同してゐる樣に思へました。そしてそんなことを云ふようになつた、Ｋの背景にはきつと何かあると思ました。Ｋが時おり見する寂しい表情を見る度每に殊にそんな氣がしました。一體私にはＫといふまたどんな人だかが解らないのです。あるかと思へば無いような、不可思議な疑でした。私はＫの心が知り度てなりません。心の奧を突とめて見たい私の心は頻りにこう動くのです。私共は花壇の所迄來ました。そこにはマグレツや、モントブレツシや、ロベリヤ、セラニウム等の西洋花がハート型の花壇に、異國趣味（エキゾチツクス）な匂を思はせて、眞中に立つたアーク燈は薄紫の光に凡を淨化しています、私は匂の高い夜の中に、Ｋと一所にこのまゝ、いつ迄もいつまでも封じこめられて仕舞たいと思ひました。二人は暫く何とも云ません。Ｋもじつとしています。私も默つていました、そしていつ迄もこうして居たいと願いました。

『まるで夢のようね』

とＫが云ました。

『Ｋさん、今夜はここで明さうじやありませんか』

　Ｋは一寸考へたらしく見えましたが、軈て『いゝでしよう』と云ました。囚はるゝことの少ない私は、常識から見て隨分と思はるゝことでも、さつさとして退けられました。拘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

泥することの少ない、物ごとを容易に考へることの出來る私は、まあ、便利な目隱を有つて居たのです。何事も六ケ敷考へるＫは、自ら復雜を作つてゐる樣なＫは、その上私よりずつと常識を有つていました。ですから滅多な行爲には出られませんでした。けれどもどこかに敏感を有つＫはくだらぬ拘泥のため美しいものを見のがす氣かと靈感と俗習とを二つ並べられたとき、痛惜の情のため靈感に向つて進んでいつもこの俗習から抽てることが出來たのです。この前もＫはきつと考へたでしよう。私は、門限がそれで巡視の者に見付つたら、何とか口實がいるだらうと云いますと、今度はＫが、そんなことはどうでもいゝといふような顏をしました。私共はそれから益々落付て話しました。

話は、漸次、私共の周圍のことに流れてゆきました。ＫはＲといふ先生のことに就て話出しました。ＫはＲ先生が藝術家に似合ず、世事に長けた事や、人を見るに餘り主觀過ぎることや、例を上げて話し出しました。私はふだんＫが出來る丈Ｒ先生の視線から逃れ廻つて居るといふ話を聞いていましたので、Ｋの評を面白く聞いていました。そしてＫはＲ先生をあんなにけなしながらもやつぱり先生を怖れてゐるなと思つてこの矛盾がひどく面かつたのです。

嘗てＲ先生を話したとき、先生はＫに女性をさんざ罵倒したそうです、するとＫは『あ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れは先生の周圍の女達のみを見て、そうおつしやるのじやありませんか』と云つたと云ふ話やそれからKの二三の特種な友に就て話出しました。それは一として彼女の歷史を赤く飾らないものはありませんでした。その中にはKの爲めにすつかり自分の仕事を捨てゝ盲動したいといふ、Lといふ女の話もありました。Kのため病氣になつたといふAといふ氣の毒な可愛そうな女の話や。それからそれへと續きました。その時はKもまだ、舍にいた時の話で、舍ではその話が隨分はずんでゐたそうです。一度Kが病氣になつて歸つてゐるAの家を訪ねたことがあるそうです。『Aもあゝして心臟病でしよう、もう瓣に故障があるんですもの、もう先が解つてゐませう、だから訪ねたんです、それをいかにも自分が興味を有つて行つた樣にAは思つているんです、舍の人もまたそうとつてゐるんです』とKは憤慨しました。

根も葉もなく、やたらに慕つて來る人、唯、無暗と私に近づこうとする人、そんな人々に對していつも私は冷たい態度をとつてきました。その人等に進もしない自分の心をそうするのは、不自然な、莫迦らしいことだと思ひます。そんなことに、貴い自分を燃し盡して仕舞ことは、考へても私には出來ません。私がこんな態度をとつたのは單にLやAばかりではありません、CにもSにもそうでした。そしてそれ等の人達の私に對する態度は、直ぐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

物好な人達の話になります。そして囃します。何囃たつてかまわないですけれど、そんな噂を強ひて求むる必要もありませんから。この間もこんな事がありました。例の赤い肘付の主ですがね、夏休に國に歸るとき、都合じや送るかも知れんと戯れました。毎水曜にはG先生の書學の講習にゆくことになつていたんです。その日も恰度なんでした、私がG先生の宅から歸つて來たのは八時半でしたが、私はふと、朝、肘付に云つたことを思出しました。あんな人のことですから待つているとも限りません。九時の汽車と云んだから駄目とは思ひ乍ら、U停車場迄行ました。すると、廣場に立つてゐるじやありませんか。正面の大きな時計はもう九時に五分しかありません。私は彼女を引立てん許にして今出ようとする青森行をやつとつらまへた位です。動き出した汽車を見送つてKはほつといきをついたそうです。Kはこんなことで人から囃されたり、自分で苛々したりしたそうです。

こうして話してゐる内に、更けてゆけば冴へて聞ゆる電車の響も消へて、あたりは益々靜かになりました。Kと私とは靴音に驚されました。

『お前達は何だ』

がらの大きい警部でした。高い脊から見下す樣に云ます。私共は默つていますと、Kに『お前は女か』と云ます、この時Kは口を開きました。優しい聲で『女』ですと云ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

向だつて驚たでしよう。この日はKも、私も時計を有ちませんでしたからよくは解りませんが、もう一時近くなつていたことは畧解つてゐました。

『十二時が公園の門限であることは知つてるだろう。それに女が今時分まで、こんな處に居るといふことはどうしたと云んだ』

『實は國の友達が上京して久々で合ひましたので、つい話が長くなりまして』

とKが云ました。すると、警部は、

『お前達は、近頃流行る、同性の戀じやないか』

とこんなことを云ふんです。Kも私も默つてました。

『お前達は教育のある女だと思ふが……』

アーク燈を脊にしていますので向ふの顏の表情は解りませんが、音聲丈は前よりも優しくなりました。

『そんなに教育のある者が今時分までうろつくなんて……もし不良少年や、浮浪人にぶつかつたらどうする？　僕だつて職務上、こうして保護しているようなもの丶、僕だつて男だぞ。』

半ばおどす樣な、からこう樣な調子で云ました。僕だつて男だぞ中々面白いことを云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と思ひました。

『あんまりいゝ夜でしたからつい遲くなりまして』

『呑氣じやないか、之からどうする』

『こゝに居る事が出來なければ歸ります』

『歸る、宅はどこだ、宅は』

本鄕動坂と聞いて警部は、呆れたといふ顏をしました。驚いたのも無理はありません、電車はなし、倖だつて有るか無いか解らないのですもの。

『それじやこゝに居ることを許して下さい。そして遠廻しに保護して下さるなら歸る必要もありません』

『それは出來ぬ』

『じや歸ります』

歸る途中のことを懸念してゐるらしいのです、そして云ひました、倖が居るかどうか使をやつて見るから、とも角交番迄來いと云ひます、交番迄來た時他の巡査は私をじろ〳〵眺めます、交番の眞赤な光を浴び乍ら、私は今更のように氣はづかしくなりました。

幸に倖がありました、門の所に待つているこごを使は云つてきました。私共は厚く親切

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を謝してそこを出ました。

今思ふとよくあんなに親切にして呉れたもんです。思ふとあの夜の凡てが不思議でなりません、最も有難かつたのはその夜警部と、三十分以上も話し乍ら、たゞの一度も私達の名を尋ねなかつたことです。好意か、偶然か知りませんけれど。

どうした事かこの日に限つてKも私も金を有つていません。Kと合せてやつと一圓足らずしかありません、仕方がありませんからある丈の金で本郷迄乘ることにしました。俥の中では二人とも車夫を憚つて今あつたことに就ては口をきゝませんでした。交番の前に來る度に車夫は一人は隱れていて下さいと云ひます。今日比谷の交番で二人一所に乘れと云はれたことを思出して妙におかしくなりました。

三丁目で車を捨てた私は、下宿にしようと云ふKを誘つて、とつとゝ駒込の方へ走らぬ許り大股に歩きました。青木堂の前迄きた時白いポインターが、私達と一所に馳け出しました。後になり前になり遂々白山迄來ました。『あの犬は私達を保護してきたんですね』二人で話しました。

動坂に着いて門をたゝきますと、從弟の一雄さんが丸裸で門を開けて呉れました。玄關にそのまゝ寢た私は暫くうと〳〵したと思ふたら窓が白くなつてゐました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Kは庭に出て、そこで二三本煙草をふかして歸りました。Kが歸つた後で朝ばらから從兄夫婦に冷かされました、私がむきになつて辯解にかゝるとなほ從兄は面白がりました。

それから暫く私はKに會へませんでした。五日目にKを訪問すると、

『あれからどうなさいました、何か用事で出られなかつたのですか、事情がなけれや説明がいります』Kはじりじり私につめかけました。あの夜以來私はKから二度程『散歩はいかゞ』といふ端書をうけています。それにも返事をして居ません。私は從姉が病氣だつたことを云ひました。するとKは、

『Nさんがいらしたさうですね、この節、百花園からの電話はありがたう。朝ばらから墨堤を散歩するなんて隨分素的じやありませんか。』

私はあの夜の翌日友のNが上京して二人で墨堤をぶらついたのです。Nは母校にゐるMといふ友を誘つて三人で××といふ文士を訪問し樣と云ふのでMに電話をかけました。Mは自分はけふ用事があつて出られないが、今Kが恰度來合せてゐるからKを誘つて見てはどこう云ふんです。私は直ぐKを呼出してもらひました。するとKは何と思つたのか、すぐ斷つて、電話を切つて仕舞ました。計畫が破れたNは寂しさうに翌日の三時半の汽車で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新橋を立つて又旅に出て仕舞ました。とかくKはNと私とを特別な友と思つているらしいのです、それともNの方で私を特別な見守り方をしてるのでしようか、Kがこの間の電話の切り方と云ひ、と角、Nに對するKの注意はそれと思當てぬこともないでもありません。

私はけふのKの態度にまごつかされました。私は仕方なしに、あの夜の朝、さんざ從兄夫婦に冷かされたことを話しました、するとKはそんなことと云つて人の氣を引いて見るかねと云ふような顏をしました。そして默つて書學紙に、いたづら書を初めました。Kは默つて三角形を作つたり、四邊形を並べたりします。私はじつとして動くペン先を眺めていましたがけふはKが全くどうかしていると思ひました。私は進ぬKを、Tの宅へ連れ出しました。がその日のKは全く私の手におへませんでした。Kは始終苛々していました。そして歸りの電車の中でこんなことを云ふんです『あなたは友達友達つて云ふが、友達にそんなに興味を有つているんですか、私は十日會ないで居るともう忘れて仕舞ます。そして忘れて仕舞つたまゝ、それ限り永久に忘れて仕舞ます』

私が默つていると、

『とに角、忘るゝといふことは面白いじやありませんか』

私はなほ默つて居ました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『人間つて寂しいもんでしよう、こうして話しているのでさへ、お互に解らないですもの、之でも通じないか、この心が解らないかと、はがゆく思ふことが今迄にどれだけそんな經驗をして來たことでしよう。私は寂しくてなりません。でもこんなことを思ふようになつて近頃私は、他と交涉は薄くしています。私に親友はありません、私は廣く淺く交際して行きます』

『じや、その時、その時に感じのいゝ友があればそれでいゝでしよう』

『どうせ、しまひには離れてゆくのですものそれでいゝじやありませんか、いゝじやありませんか』

Kは二度いゝじやありませんかを繰り返して、知らん顏をして彼方を向いて仕舞ました。

『あなたは、それで幸だ』

Kはそれには返事もせずに、さつさと車掌臺の方に行て、乘換を請求しました。

小川町でKは降りました、私は車の上から、冷かな一瞥をKに送りました。Kも變な顏をして見上げました。

水道橋で赤い札を掛けた電車は、墓地に走りました。私は車の中でKが憎らしいと思ひました。强い女を一度うんと抑へて見たくてなりません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がそれは一瞬の閃きに過ませんでした。春日町迄來る内にKに對する私の反感はすつかり變つて仕舞ました。人の欲點や弱點に甘くつけ込んでやり込めることばかりするどこ迄可愛相な女だらう。どうしてあの人はあゝ苛々するのだろう、こんなことを思ひ乍ら、何だか哀れな氣がし出しました、私はKの胸を抱き締めてやりたいような氣がしました。私は本郷の高臺を見あげ乍らKのことを思ひました。

こんな風で私はKからは折々失望させられました。反感も起りました、がその失望も、反感も暫くすると、煙のように消えて仕舞つて、その後は、なほ進まねばおけないように私の血は一層烈しく動き出します。考へて見ると不思議な位ですね。

家に歸つても落付けません、私は又直ぐ又Kの宅まで引返しました。Kは未だ家には歸つていません「もうお歸りでしよう」下宿のおばさんは私をこう止めました、私はとも角二階で待つことにしました。軈てKは歸つてきましたが、出たときと同じく悶へに悶へました。不思議に私にはそれが、何の苦痛にも、不愉快にも見えません。高窓の硝石には夕日が赫々と燃えていきます、私はこの室と、赤い夕陽と、悶へる人とを只美しく眺めました。

それが一時間ばかり續きました。それからKは起つて優しく床を延べました。そして優しい聲で『お休みなさいまし』と云ひました。眼が痛いからと云つてKは電氣を消しました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青い月の光が窓からさしました。

『もがける丈け、もがきなさい、悶へる丈け、悶へる丈け』

こんな聲を聞いたかと思ふと私はKの腕にすつかり搦められて仕舞ひました。私は逃れようとして、身をもがきました。が全く不可能でした。Kはちつとも動かしません、その内に疲れて汗びしよになつて仕舞ました。一端弛めた腕に又力をこめて私を抱きました、そして強く、『解りますか』と云ひます。

私は固くなつたまゝまだ默つてゐました。

『解りますか』

その間にやつと落付いた私は『解る樣でもある』と云ひました。するとKは鋭く、

『解りませんか――、今夜は私の凡てを、何も彼も、何も彼も、あなたに上げます。さあどうにでもなさい』

抱かれた時抱き締めて返す丈の溫さを、私はもつてゐました。私は強くKを抱きながら

『吸いたいようですね』

『吸はれたいでしょう』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とKは反對に私に逆襲してきました

『之が同性の愛と云んでしようか』

と稍過つて後Kは云ひました。そして又云ひました

『でも私は明日になれば皆けろりと忘れてしまひます。』

とこう云んです、私だつて何ともありませんよ』と云ひますと、Kはじや電氣をつけますと云つて起つてねぢを、ひねりました。私は毛布の中から『眩しい』と云ひました。するとKはさも愉快さうに笑ひました。

『今のはわざとよ、あなたが何と云ふか、一寸ふざけて見たのよ』

私は毛布をはね退けて笑ひました。するとKは又いらいらし出しました。

『どの顔見ても、どの顔も、どの顔も、眞面目な顔は一つもない。』

私は刺されたように思ずつとしました。

私は眞心こめてKの唇を吸ひました。するとKは

『またふざけますかね』

こう云つて、側にあつた葡萄酒をあふりました。酒のいゝ香が私の顔にかゝります。

不思議じやありませんか、Kの唇に觸るゝ私の唇は恰も異性のそれに觸るゝような感覺

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を覺ゆるじやありませんか。私はKの腕に抱かれたまゝ、この奇しき運命のまゝに、何時迄も、いつまでもこのまゝ居たいと願ました。

こうして朝迄續きました、不思議な第二の夜がまた私の上にきました。

其翌日Kから一枚の端書を受けました。不意に國へ歸ることになつた。私は明後日東京を立たうと思ひます。よかつたから明日もう一度、歩こうじやありませんか、と云つてゐる。

私はすぐ出かけました。そして坂の中途からKの二階の窓を見たとき、含羞とも、恐怖ともつかぬ一種の不安を覺えました。私共はすぐ出かけました。可笑しいじやありませんか今迄お互手をとつて歩こうがどうしようが平氣だつたがあの夜から急に、お互妙に警戒しているやうで近くことが出來ないのです。

心ではKに接觸を願ひ乍ら含羞は私を反對の行動にもつてゆくのです。私共は水道橋迄こうして歩きました、そして甲武線で新宿に降ました。

町はづれにきたとき、ふと立止つたKは私の手に小さい銀貨を渡して『お願します』と云ます。私の側には煙草店がありました。私は直ぐそこで敷島を買ました。そして默つてKに渡ました。Kは『有難う――』と輕く受けました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

烈しい日の照る戸山ヶ原を横切つて、私共は雑木林の中に行きました。私共の眼の上には、若い樺の葉が夏の日光を透して、華かな青色を見せています。彼はすいすいと美しく透つて見ゆる葉脈をなつかしく思ひました。殊更けふは堅い殼を被つているKにはさとりつく術もありません。私は木によつたまゝ空を眺めました。青い木立の間から、白い雲がむくむくと上つて來た見る間に、青い葉の上に一ぱいに擴りました。私はふとこの間讀んだ小説の――小山に白羊の群が上つて見る間にその青い山が、眞白になつてゆくと云ふのが思出されました。

暑い日を雑木林の中に避けて、赤い夕陽となる頃私共はそこを出ました。廣い戸山ヶ原を横るとき、太陽は血のようになつて閃き乍ら二人の前に落ちてゆきます。赤い土の上を歩き乍ら二人は顔見合せて微笑します。私はけふ初めて寛いた氣分になりました。――思ふとあの時二人の魂が解け合つたのも全く自然の美に醉はされてあゝ云ふ氣分になれたと思ます。

その翌日の午後三時四十分私は遠く西の國に歸つてゆくKをS停車場に送りました。

私は之が最後だぞ』といふ聲は何處かで聞きました　若しもこの時私はKと二人の青天

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の下であつたなら私は最後の口づけをKに押したでしよう。けれども私の周圍には多くの人が居ました。私の自然は遂にそのまゝ死んでしまいました。

Kを送つて私はすぐその日の感想を歌にして投函しました。Kは何と思つたでしよう。神經質なその氣の小さい人が眞赤になつて憤つたか、蒼くなつて不愉快がつたか、それとも、うんと自惚たか。

私とKとの交渉は之丈けです。

いづれの場合に於ても凡に私が讓歩の態度に出た爲、勝氣なKは、逸早くも凱歌を奏して引上げたかも知れません。思ふとほんとうに不思議な交りでした。そして短かい時に於て多くのローマンスを敢てしたK、いつも鮮かに私の眼に映ります。今でもその人が何かにつけて思はるゝのです。

旬日の友！全くそうでした。全く。

Pはこゝ迄話してほつといきをつきました。そして又云ました。Kが私に誇かに話したしLといふ女も、Yも、Aも、Sも、Cも、最初Kの方から誘つたといふことが私の經驗で知りました。私もその一人だつたのです。そして又、私は思ひました。Kは私を誘つたと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でもいづれの場合に於てもKと共に、私は自分をも客観してゐました。

けれどもそれから私の心にセンチメンタルを作るには十分でした。でもその感傷は私にとつて、決して苦痛ではありませんから、あなたは心配して下さるな。それは私の美しい憧憬の、甘い歎きにすぎませんからと。

三、二、一〇

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

AとK子——有田勢伊

Aは善良な男である。渠は決して他人を害したり、僞つたりしない。渠は渠の友人や家族の人達から正直で素直な人間として評價せられてゐる。

渠は決して敵を求めることをしない。渠は、何か事を仕樣とする時には、其事を爲すに先だつて、先づ四圍を見廻すことを忘れない。而して、其事が若しも他人の惡感を惹起すやうな影響をしたり、他日、渠自身に苦痛を求めるやうな虞れを見出す時には、渠は何も深い考慮を費したりすることなしに、仕事を諦めてしまふのである。だから渠は、惡をなさないと共に善をも行つてゐない。渠は毒をも藥をも齎さないやうな人間である。世間の人達は渠のやうな——何事にも世間に氣を兼ねてするやうな人間を歡ぶものである。渠のやうな人間は世間から歡迎せられてゐる。

渠は輿論だの、俗衆だの、習慣だの、暴威の前に自我を虐げてをることの安易で悧巧な道をおぼえ込んでしまつた。渠の考への中には自我も個性もない。渠は虚僞を憎む者の憂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

悶も、眞を求むる者の歡びも知らない。

渠は他人の批判に依つて自己の價値が定められるものと惟つてをる。敵を求めたり、他人から非難せられたりしないのが善良であると惟つてをる。

渠は敵を怖れるが爲に、他人の前に自己を鮮明に表すことを好まない。此見解に依つて渠は又主義だの、主張だのと云ふものを有しない。

渠は世間の大海に沒入してゐて、潮流のまゝに自己を動かしてゆくことを最も安全な處世法と心得てゐる。

戀愛――斯ういふ感情的な問題に就ても渠の悧巧な、妥協的な心眼は決して度を失ふやうなことはない。

渠には恩人の妹でK子といふ許婚の女がある。渠はK子を嫌ひではないが、K子の怖ろしく自我の念の強い、折々は周圍の總てを忘れ去つたやうに利己的な行爲には、不快な念を起させられるのである。

K子は非常に自尊心の強い女で、渠女の歡びは眞理を見出すことである。渠女は他人の定めた眞理ではなく、渠女自身が見出した眞理に從つて己の途に直進しやうとしてをる。

それ故渠女は自巳の眞理さへ肯定するならば輿論の壓迫だの、世間の非難攻撃などの權威

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は認めなないでもいゝと思惟してゐる。

ＡとK子とは其性格や思想の相違してゐるやうに、貞操といふことに就いても根抵的に違つた見解を有てゐる。Ａのは因襲的な考へからして、貞操は女子に對してのみ要求せらるべき、特別なる婦人道德であつて、男子に於ては其必要を認められない。といふのである。そして其理由はといへば、何でもない、婦人は從來の習慣として世間から、そうするやうに餘儀なくせられてゐると云ふのである。

K子は貞操に就ても、やはり渠女自身の眞理に立脚したところの極端に潔癖な主張を有てゐる。

貞操の要求は絕體に均衡を保たるべきものであつて、性の相違に依つて輕重が分たるべきでは無い。婦人に對して清淨なる處女を要求することの能る男子は、渠自らが純潔なる肉體と眞實なる愛情との所有者でなければならぬ筈である。而し或人達には言はれるかも知れぬ。若しも一般の婦人が斯樣な定論に據つて結婚をしやうとするならば純潔なる男子の少ない時に、婦人達は配遇者を見出すに困難であらうと。けれどそれは寧ろ婦人の覺悟に依ることであつて、若し總ての婦人が此主張を飽迄も強く固持して押し進むならば、そこに純潔なる男子は、自ら現れて來るわけである。何故といふに、初めに無垢な男子の血を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

汚した其ものは誰でもなく矢張女があつたからではないか。

　一體日本の婦人は無闇に、平氣で犧牲を拂ふことになれてゐるやうである。犧牲といふことは或場合、尊いことには相違ないが、凡ての場合に、犧牲其物に絶體の價値が認められるといふわけのものではないのだ。

　結婚をするにあたつて、多くの婦人は唯無自覺に、男子の性慾の犧牲になつて、それで滿足してる外に何の考慮をも有してはゐないやうである。何といふ意氣地なさであらう？十幾年、又或者は廿幾年の間、――其間の或期間は遁れることの出來ない性の壓迫にも堪えながら、大切に保たれてきたところの尊い處女の節操が、愛情や尊敬の、相當な代償も支拂はれずに、他人に與へられるのを惜しいとは思はないのであらうか。

　是からの女はもう「親の手から他所の男の手に賣られてゆくのが女の運命である」といふやうな、卑屈の觀念を悉皆頭の中から除き去つてしまはなければならない。

　神は凡ての人類に一樣に靈と肉とを與へ給ふた。私達は神の手から、直接私達の手に私達の靈と肉とを與へられたのである。

　私達の靈肉は私達の所有であつて、それを支配命令するものは、自己の意志でなければならぬ筈である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私達婦人はもつと切實に、深刻に、自己を瞻るのに銳敏な瞳を瞠らなければならない。今日猶、「女だから」といふやうな屈辱的な言葉が婦人自身の口に慣用せられてをるのは洵に歎はしいことではないか。そうした言葉は異性から安價な同情を求むるための卑劣な精神によつて使用せられるのである。

無闇に自己を卑下することが謙讓の美德ではない。自尊と傲慢とは形に於て類似したところがあつても、其の精神に於ては全く異つてゐる。傲慢は戒むべきことであつても、自尊は自己の向上に最も大切なる精神である。婦人を今日あるやうな、屈辱的な位置から救ひ出すものは婦人の自尊心であるのだ。總ての婦人が自尊自重して自覺ある行動をとつてゆくならば、婦人を男子と同位置に進めることも難くはあつても決して不可能なことではない。

從來婦人特有の劣情のやうに思惟せられてゐた嫉妬、怨恨、呪咀などは、もはや女ののではない。私達の尊い精力はそうした、つまらないことのために費してはならない。私達の全精力は自己の革新のために費されなければならないのである。

凡ての花が果實を結ぶべき運命を有してはゐない。凡ての女が結婚すべき必要はない。女は「お嫁入り」にばかり齷齪してゐてはならない。自己の主張の爲に婚期を失ふやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女もあつてさしつかへない筈だ。男子のために無價値な犧牲を提供するのと自己の主張の爲に殉ずるのといづれを選ぶべきであらうか。

此頃AのK子に對する愛着は益々薄らいでゆくやうである。けれど婚約を破棄するといふことはAにはどうしても出來ないことなのである。因襲的なAの頭腦は「許婚」といふ名稱に對する執着と、峻酷な世間の非難を怖れる念とのために自由を失つてゐるのである。K子は渠女の友人達が學校を卒へると、大急ぎで嫁いでゆくのを見送りながら、「私は私の眞理が肯定する時でなければ結婚をしない」と云ひ張つてゐる。

善良なるAは、渠の怜巧な處世法に依つて贏ち得たる世間の聲望の中に、幸福を感じつゝあるのに反して、K子は渠女の眞理が同性間に於てさへ一人の同情者を求むることが出來ないで、全く孤獨の境遇に寂寥な日を送つてをる。

而し、渠女の主張は境遇の壓迫に依つて枉げられる程薄張なものではないと渠女は云ひはつてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女友達——川田よし

大荒れした雪の日の後に、殊別に見る凜然として晴れ切つた日の午後。

表皮だけを刺す樣な、しかし熱を伴はず、何處か賴りない光線は、斜に雪の上を滑つ、て硝子を透し、東の壁に大膽な對角線を描く。

ストーブの燃えさしの薪のくづるゝ音にも、氣を亂さずに、一心に手紙の上に動く女の瞳には、驚怖、憐憫、不審、歡喜、樣々の表情が輝く。日蔭の狹まつてゆく壁に、ほつと瞳を上げた澄子は、初めて氣付いた樣に、『寒くなつた。』と胴震ひして、薪を投げ入れる。ぱりぱりと音立てゝ、燃え易い樹脂に、はらはらと赤い炎が舐め上る

『今日は私の記念日です。でも私は何一つ、私の心を慰めてくれるものを持ちません。小さく閉ぢこめてゐた私は、もう堪へきれぬ悲しみに泣いてゐます。私は私の小さい悲しみを、かなしんでゐるより外仕方ありません。久しい間私はあなたに苦しめられてゐます。私はそれを殘酷だと思つてゐます。私はその樣な苦しみの下に居れば、どうしても

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あなたに縋つて行けません。いつ迄も私は獨なのだと思ひます。私は愛されることの出來ない女なんです、只悲しい。只苦しい、

あなたは全く私を捨てた。一寸も私をいとほしんでは下さらない。今日は私の記念日です。今日一日でもよい。私はそれが虚僞でもいゝ、私はやさしくしていたゞきたいのです。どんなに苦しくつても悲しくつても、決して私は人に語るまいとしてゐましたけれど、今日は泣くより外ない悲しい日です。私は今、全く淋しい。全く獨です。永久にそうなんでせう。今日はそんなことがたへられません。そのためにあなたに、また新らしく友達になつていたゞきたいと願つてゐます。矢張私が惡かつたのかも知れませんけれど、今日は許して下さい。』

再び机に歸つて讀み返す。

『矢張あれを怒つてゐたんだわ。私は別に惡意に持つてゐなかつたのに、却つて心配してゐたもの。』

獨語しながら澄子は、此二十餘日の光子の冷淡な朝夕の心苦しさを思ふにつけ、せきとめられたなつかしさに、急いで行つて、光子の手をとつて泣きたい樣な氣もする。

いつ迄もあの樣な氣まづさで居られる二人とは思はなかつたけれど、思へば不思議な二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の仲である。去年の末に、遠く澄子を訪ねて來た民子を、光子の自由にさせなかつたことから怒つたらしい。其後澄子が宿代へをしたのに、其手傳さへしなかつた。然し澄子はそんな些細な事のためではあるまいと打ち消して、お正月初めに逢つた時も心よく、言葉をかけた。けれど光子は、他々しい避ける樣な態度をとつた。『どうしたつて民子さんのことを怒つてるんだわ。』と思はせられる。

でもまた一方では、『誰だつて一人きりで考へたい時がある。誰にも誰にも指一本觸つてもらひたくない時、全く一人きり隔離しておいてもらいたい時があるもの。光子さんの今だつてそれなのだ。』とかう自分に辯解して見たりした。けれど何も何も打ちさけて、殊に淋しさには一人で堪へられぬ光子の性は、訴る唯一の友として澄子を賴つてゐたのに、あまりに疎々しい仕打であつた。『お早う』とも『お休み』とも此二十餘日は、交したことがなかつた。それが毎日顏を合せる二人であつた。澄子は決して惡意は持つてゐなかつたけれど、他々しくする光子の原因の解らないだけ、自分から折れて出ることは出來なかつた。此頃はそれが傍觀者の地位に立つ樣になつた。

『光子さん今朝は泣いた樣だよ。眼が赤い。髮も梳かないらしいよ。何かあつたんだな。』

冷やかに觀察してゐた。今朝だつて、

『眼が赤いな。昨夜はきつと眠らなかつたんだらう。あの傷々しい物思はしげな樣子。』只一瞥したきりである。二十餘日前の澄子なら、やさしい言葉をかけて近づいたのに。澄子は友の交りの儚さを思つてゐた。其處へ全く豫期しなかつた光子の手紙が來たのである。やさしくしてくれ。新らしく友になつてくれと云つて手紙が來た。

東の壁に殘る僅の陽色の、一際赤らんだのに驚いて、澄子はペンを急がせた。

『あんないやな日が二人の上にあつたと思ふだけでも苦痛である。光子さんがあゝして他々しい態度をしてくれた間も、私は光子さんのことを忘れはしなかつた。此頃缺勤した時など、心配になつて、光子さんの宿へ行つて、其頃の光子さんの樣子を聞いたりした。瞳が合ふと、鷹に睨まれた雀の樣な怖づ〳〵した樣子を見るにしのびなくなつた。逢ひませう。そしてもとの二人の樣に話をしませう。』

折返し返事が來た。

『逢つて下さることがどんなにうれしいか知れませんけれど、私は恥かしいのです。何にも思つて下さいますな。私は破れた小さいものですもの。此の上私を悲しませないで下さい。私は何も思ふてはゐません。只此上なくみじめなものと思つて。死んでも生きてゐても同じだと思はないでは居られません。此上なく小さいあはれなものを、いとほし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んで下さることをよろこびます。私は寒い私の室に獨でゐます。お惡いでせうか。どうぞこゝへいらしやつて下さい。私は怖れてお待ちしてゐます。逢ふのを人に見られるのさへおそろしいのです。』

愈々逢ふと定まつて見れば、怖しさとも不安とも知れぬ或物が、澄子の心を騷がせる。

『逢つて何の話をする心意だらう。私には何にも云ふことはない。どうして光子さんが私を怖れてゐるのかそれも私には解らない。此二十餘日の間に、二人の心は遠く遠く隔離したではないか。何故光子さんは此頃×町へ歸つたか、それさへ私は知らない。今日は光子さんの記念日だといふ。それも知らない。私は心にもない空虚なことを云つて慰めることは出來ない。民子のことについて怒つてゐたとしても、それは只あのひとの邪推だけのことで私から詫びる理由はない。ほんとにほんとに何にも云ふことがわからない。

『御目にかゝり得られるかどうか今の私には一寸決心がつき兼ねます。』

と走り書きして使に持たせてやつた。

そして澄子は、手あたり次第に新聞を見たり、雜誌を見たりしてゐたけれど、何も心には留まらない。待ち佗びてゐる光子の姿が、ちらちらと紙の上を走つた。澄子は逢ひに行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かずには居られなくなつた。長い廓下を足音をしのばせて行く。光子の室の扉は閉つてゐた。冷いたハンドルに手をかけた澄子は、我にもあらずぶるつと戰慄した。

『光子さんは何故扉を開けておいてくれないだらう。私に此扉がでれほご怖しいか知れない二人の間を全く遠のかせる鐵の扉のやうに。此冷たい運命の扉に隔てられて、もう理解も同情もない二人になつて行くのであるまいか。』

躊躇して佇んでゐた。澄子はまたそつと引き返さうと思つた。我にかへつて考へれば、やはり別に云ふこともないし、慰めることも不可能だらうと思はれる。其時室中で紙の音ががさがさとした。澄子は、無意識に追ひ立てられた樣に、吸ひよせられた樣に扉を開けた。光子は、ストーブの傍に泣いてゐた。

『あゝ民子のことについて怒つてゐる。』と直覺的に思つた澄子は、

『私わるかつたわねえ。』

光子の肩に輕く手をかけて、やさしく云つた。光子は一しきり激しく歔欷した。

『私、わたし、さみしくつて。』

『…………』

『去年、民子さんの來た時のこと思ふと、私苦しい程さみしいのですよ。澄子さんには民子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さんさへあればいゝのだ、私などもう思つてもいたゝかれない……と思つて、どんなに泣いたことでせう。私はほんとに一人きりとり除かれた樣な氣がしました。』

澄子の眼の前には、その時の光子の忌々しそうな眼付や、敵意を持つた淋しさに滿ちた姿樣が浮いて來た。あの時はたしかに澄子も惡感を抱いた。一面識の民子に、只好奇心で近づいてしかも獨占し樣とする態度が、何處か淺薄に輕々しく見えたから。民子と光子とは相反する二極端の型の女であつた。

パッショネートな、エゴイスチックな光子と、日本在來の女の淑やかさを集めた樣な民子の沈思の態度とには、相通ずる理解の鎖はまだ生じなかつた。民子は光子を怖れて嫌つた。

『あなたが民子さんと話をして一晩暮したいと云つた時、民子さんはすゝまなかつたんですよ。民子さんには到底あなたの心持はわかりませんものね。』

『まあそうなんでしたか。民子さんがそんなこと思つてゐるとは思はなかつた。』

光子は、澄子が殊更二人を遠ざけたのだと、邪推してゐたのであつた。

『今日はね、私とKと初めて戀を打ちあけた日です。だけど、だけど、私はねもういつ迄もたつつた一人きりでとぼ〳〵行くのだと思つて淋しくて居られなかつたのだすよ。今

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

日だけは、やさしい人の手に沈みたかつたものですから。私のわがまゝを許して下さいね。』

Kさんといふ言葉を聞くと、澄子には、光子が弱いやさしい者に見えて來た。

光子は、Kさんといふまだ中等教育を受けてゐる年少の異性を戀してゐるのである。

光子は弟の樣に愛し慈しみ、Kさんは姉のやうに慕ひ敬つて光子に近づいた。それがいつとなく同一線上に引き上げられて、お互に逢はなければ居られないやうになつた。そして萬一もとの眼を内心に泣いた、愈々戀と意識し打ち開けたのが去年の今夜であつた。

それから歡喜に滿ちた幸福な生活は、寂寞を背景としながら、半年許り續いた。然しそれは間もなく社會的に現れて、多少問題にあらうとした。末が學生のKさんは、それが怖しくてたまらなかつた。とうと光子さんに、逢うことも、文通も斷つてくれと云つて別れてしまつた。

『まだ子供なんですよ。級長などしてゐるものですから餘分に社會を怖れてゐるのも無理はないですけれど、でももう少し强くなりそうなものと思ふのですが。』

物足らぬ樣に光子は、よく澄子に慨いた。そして耐へきれなくなつて、變名で封書を送ることも度重つた。然しKさんからは、はがき一枚來なかつた。その淋しさに弱り果てた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

光子は、不安を抱く様になつた。とても、とてもと云つては、絶望の表情をする時もあつた。Kさんは、中等教育は今年で終るけれど、それからの永い高等教育。光子は大學卒業迄の年子を指折つては、深い吐息をした。もう廿才の上幾つか重ねて自分の年の心細さと、ひそかに、そゝのかされる春的欲望の芽生を意識するにつけ、この戀が益々儚いものに思はれるのであつた。

『たつた一言でよいから返事をして下さい。』

弱々しい心になり切つて、空しく返事を待ちつゞけた幾日もあつた。

　その間にも多情な光子の上には、Aといふ異性、Bといふ異性が、各自異性の神秘を以て、近づいて來た。光子はその異性の間を立ちまはりながら、ともすればその戀のハアモニイに醉はうとした。然し一度醒めてKさんの上に思ひいたる時、何といつても私の唯一の異性はKさんだと。――ともすれば外れ易い感情を庇護して、Kさんを依頼する心に、油を注いで火力を保たうとした。

　初秋からの光子の心は、頼りない淋しいものであつた。今かうして一年經つた。あゝ一年前の二人だつたら。――光子は熟々さう思ふのであつた。追憶の交々湧き立つのを、宛ら一年前の光子に立ち歸つたやうに、面を輝して、いろ〳〵と澄子に物語つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ストーブの火は空しく灰に消えた。硝子越しに見える南の連山は、うす寒い藍色に眠り、雪の野は、底沈みする樣に、青白い月夜の襲來を緊張して待つてゐる。

『歸りませう。あまり遲いから。』

『お話すれば何でもありませんのに、いつ迄も澄子さん、私を思つてゝ下さいね。』

二人は手をとり合つて凍氷した道の角で別れた。澄子は和いだ心持に浸つた。

『あなたの手はいつも熱いことね。男の樣に。』

ふりかへつて云ふと、光子は屈り角に立つたまゝ、此方を見てゐた、潤んだ眼をして。

民子に對しての光子の態度を心よく思はなかつたといふことが、光子をして、孤獨の境地に悲痛させる迄でになつたとは、澄子には思ひよらぬことであつた。バニテイの強いオノトに輝く光子としては、獨占し樣としたものを奪はれ、且つ一人きり除外されたことは自尊心を傷けられた點に於て、外部を怨み憎む心になつたのは、道理あることである。もし澄子であつたなら、その眼を泌み泌み内心に沈湎させて自己の貧弱と欠點に思ひ致つて、悲しむ筈である。そしてその眼には眞實の、眞珠の樣な涙が輝くことだらう。其點に於て光子と澄子とは各立脚地を異にしてゐた。

久しぶりで打ち解けたとは云ふものゝ澄子の心の底には、何か物足らないものが翌日も潜んでゐた。澄子は光子を避けて、二人の友情を考へ様とする思ひ深い眼付をしてゐた。勤を退くときも、かくれる様にして歸つた。

昨夜のあたゝかさに、斑消えした田圃の畔を、物思はしげに首垂れて歩むのは、澄子である。川柳の蔭には、去年のさるまめの赤い實が、鈍く色褪せながら、まだ珠の風情だけをとゞめてついてゐる。枯草の下からは、もう緑の葉が見え初めてゐる。緩かに流れる水の姿にも、春の近づいたけはひがある。枯草の上をそゞろに踏みながら、澄子の思ふことは、同じことであつた。

『一體私は、光子さんにどれ程同情してゐるだらう。どれほど力になつてゐるだらう。憎くんでゐる。心よく思はない。それだけは爭はれない事實であるけれど、さりとて二人は離なれ難い縁の糸に繋がれてゐるではないか。何故そんなら心よく思はない光子の缺點を、赤裸々に云はない？　だつて光子さんは、それはもう承知してゐるらしく裝ふ。あのひとの性質として、自分から自分の缺點は慨いても、他から干渉されたと思ふとき、憎々しいほど反感を持つ。だから云つたつて何にもならないではないか。けれどそれは同情する者の態度に缺點もある。とにかくその殼を破らなければ、眞の友情は成立しない筈である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世間並みの妥協的な空虚な友情に過ぎないではないか。』

自問自答した澄子は一切を光子に披瀝し様と考へた。

『戀人に對しては、誠實と純潔とを保たねばならない。廣い世界の異性の中に、只一人きりの異性として信じなければならない。それはつまり、他の異性の神秘には觸れないといふことを、必須の條件とすることである。理解以上のことを要求してはならないといふことである。それを光子さんには、さうした節制がないではないか。『私のKはね、私の過去を知つたの、そして過去を許してはくれない。』といつて過日悲しんだことがある。何故さうした時潜行的の態度に出てくれないだらう。Kさんの樣に初戀の人にとつては殊に、女の純潔を要求する。その時に、あまりにオープンドされた光子さんの態度を知つたならどんなに、不滿に思つて不安を抱くだらう。『寂しさへにたへられないから、慰めてもらひたいのです。』それは光子さんと口實である。また一方に無理もないと思ふけれど、浸されぬ一つの强みだけは失つてもらひたくない。

獨歩の云つたやうに、どんなに私達の生涯は寂しく苦しんでも、眞にその意味を知つて、それを味はうことが出來れば、幸福ではないか。その寂しき頼りなさを通じて、初めて人生に觸れることが出來るであらう。其處に眞の幸福が開展される。其處迄行かなくて、弱

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るのは、人の情を徒らに待ち受ける人情の乞食である。其點で光子さんの態度は中途半端である。もつとKさんを信じる心に結晶させなくては。……あゝ明日は逢つてさう云はう。』

澄子は久しぶりに晴々して水田に寫る細り木の枝と、夕日の白い影を心よく眺めた。

『何誰？　光子さん？　それとも民子さんなのかしらん。』

雨戸の蔭には、ショールに包まる樣にして光子が泣いてゐた。月のひかりに、いつになく青白い面をしてゐた。

『まあ光子さんなの、どうしたの？　泣かないで頂戴。』

澄子は姉らしくいたはつて、室内に導いた。

『許して頂戴。私さむしくつてひとりでは居られなかつたものですから　宿のおばさんは妙な顔をして私を見るし、もうもう私の居る處はありませんの、先程からちつと外に居ましたけれど、お呼びし樣かどうしやうかと思つて。』

『あらわるかつたわね。私風の音か何かと思つてゐたの。今夜はね奉公人のお年とりだからつて、宿で御馳走になつたのよ。ほら顔が赤いでせう。御酒もいたゞいたの。上機嫌

よ。私あなたのふさぎの虫を追拂つて上げるわ。私許り氣持がよいなんて御義理がわるいわねえ。』

光子は泣を拭いて、つり込まれた様に、幽な笑ひを浮べて面を上げた。

『私御目にかゝつてよかつたわ。私のために澄子さんの御心を傷けはしないかと心配してゐました。あのね、夕方からKの手紙を初めのからすつかり見たんですよ。そしてもうせつなくて……。私のKは何故手紙をくれないでせうのね。『いつ迄でもあなたのことは思つてゐる。』つて最後の別れの時だつて云つたんですけれど。

光子は殆ど夢中で、またKさんの話をした。疲れてお茶を飲みほした時は、生れ代つた程に活々してゐた。

『私どうしたんでせう。』

ほのぼの火照つた頰を輝かして、今迄の鬱陶しい氣分を、思ひみる様な眼付をした。

澄子は夕方考へたことも、云ひ出す機會がなかつた。光子の氣分を、大切にしてやるやうに、一緒に微笑したりした。

『先程はね、私澄子さんがなつかしくて、とびつきたかつたのですよ。だけど民子さんかしらんつて仰しやつた聲に、ぶるつとしましたわ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

床を並べて灯を消してからも、はつきりした聲に何かと物語つた。戀人ででもあるやうに澄子の手をしかり握つて、顔をよせたりした。

眞夜中に二人は庭に下りた。月輪は大きい御笠を召して、見渡す限り野と云はず山と云はず、木立と云はず白み渡つてゐる。白い粉でも吹き散されたやうに。

澄子は戀人の面影をしつくり胸に抱いた。

『私の精神的所有、私の肉體的所有、それ以外に何の所有もないのです。私はあなたの信實な、心と體との生活をする間だけ、眞の幸福を生活のミイニングとを感じます。二人の生活、二人の生活、そのためきりです。私の藝術であり、神であり、戀であり、――一切であるのがあなたです。』

夕方受取つた戀人からの、この興奮し緊張してゐる手紙を思ふと、幸福を感じないでは居られなかつた。只戀人を思ふだけが私に眞なのだ。民子は私達二人のときは手紙を書く氣になれないと云つた。光子は訪問をひかへるといつた。あゝ一切である戀人以外に、何を要求し期待しやう。友情だつて儚い水沫にであるまいか。光子に對しての心情も、暫し澱みに浮ぶうたかたに、過ぎないではあるまいか。戀人を思ふ間は、光子がどうあらうと、それに行けない程、些細なのが友情であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『澄子さん、何考へていらつしやるの、冷えるといけないから這入りませう。』

『あら光子さんは、其處にゐたの。』

光子は杉の木立からとんで來て、澄子に抱きついた。

『うれしい、うれしい光子さん。こんな晴々した氣分にはいつなつたまゝでせう。』

月光の中の光子の瞳は、きれいに輝いた。宛ら心も體も任せた戀人に、より縋つたやうに。

白ざけた月輪は、網のやうに亂れて柿の木の枝に懸つて、小きざみに動く人の情を、觀照してゐる。聲を失へば、靜寂の夜氣は、深々とあたりをこめて峻嚴な眠りが漲つてゐる。

まだ書きをわりませんけれど、幾分でもS子さんの内省のたすけになれば幸ひだと思ひます。

――(大正四、二、一〇)――

愛する師へ

千原代志

主にありて愛するB先生。

○○では皆樣御變もございませんか、私が○へまゐつて三日目の今日、二人の先生とNさんTさんはみんなそれ〴〵訪問に御出かけになりましたので、私も午後からひとりで山登りをいたしました。

あの段々になつた畠ばかりとな申しながら可成急な山道を、たつた獨りぼつちで漸々と眼下に展けて來る市街や軍港を振りかへりながら輕い步調で登つて行くお轉婆姿が御見えになるでせう、眞晝間だといふのに人陰一つ見えませず、一寸淋しいとは思ひましたけれど、一しきり登つては思ひきり大きな呼吸をつき、踞つては眼下の市街を瞰下し、誰に遠慮のゑの字もなく四肢身體を自由に振りながら、調子をとつてまゐりますと、自分ながら驚く位少しの疲勞も感じませんでした、この點だけは却つて獨りの方が自由でいゝなどゝ始めての經驗を致しました。

畠の山を登りきつて松林の中の小路を通りぬけ本山へかゝりました。內海の山の特徵で地膚の見えすいた骨ばつては居りますが、それでも私にとつては久しぶりに何とも言はれぬすが〴〵しい心地でずん〳〵登りました。やがて頂上の、軍港は勿論この

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山を境に〇の市街とは全く反對の側の静かな港の見える地點迄達しました――港と申しても船は一艘しきや居りませんでしたが、でもこれが私の港よと言ひたい位静かでおだやかで好きでございました。空は寧ろ晴ては居ませんでしたが春はあらそはれないもので空氣はふうわりとかすみをこめて寒中だなどゝはおもはれない暖かさ、ぽかぽかと身内の血が湧く樣に自分ながら皮膚の色が、美しいもゝ色になつて來たのを感じますと、たまらなく嬉しさがこみあげて來て、思ひきり大股にそこらを歩きまわつたり、手足をひどく動かして見たり、山ぢうの空氣を一人で吸ひ込んでしまふつもりで急に大きな深呼吸をしたり、又眠と港の景色に見いつたり大きな聲で私の好きな『あふぐ高嶺の白雪に朝日にほへるヘルモンのを歌つたりしました。』恰度今汽笛とともに黑煙を吐いて實々と汽車が停車場に着きました。多分〇〇からでせう、物事に可成面倒臭がりやで、刹那の感じ以外にさういふ方面の觀察などいふ事には一向無頓着な私でも流石に工廠と停車場だけはそれと眼にとまりました。日本一の軍港と言はれるだけにその地形などたまらなく成程と肯頭かされました。一昨日晩方に始めて着いた時この市街の感じはいゝものでございました。機械工事の音響、職工の喚き、煙突の黑煙、汽笛、眩惑させられる店頭の强烈な色彩、夕方などにたまらなくつがれて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

過敏になつた感覺をそゝり立てる樣な紛混かつたものゝ臭い、かうした軍港地にありがちのあらゆる混沌と喧噪の所謂俗惡極る中に自ら力と生命の横溢を見出されます。殊に月半ばからの市中の活氣づき樣つたらないさうでございます、職工の生活などゝいふものは却て單純で無邪氣なあけつぱなしなところがあつて可愛いとおもひます。

そこから少し降りて凹地になつた松の根がたに腰をおろして、懷からワイルドの、獄中記を出して讀まうとしましたが、却つて眼をつぶつて冥想せねばなりませんでした。周圍がシーンとなるといつも安念になやまされる私は、此時こそ何かたつた一つの美しい點に心を集注させやうと努力して見ましたが、やつぱり駄目でした、何とも言ひやうのないこんぐらかつた思想や感情の雲が湧き起つて來るらしく、私はなるまゝにまかせました。やがてそれも一過すると自然にあたりの靜寂の中に引き入れられる樣に、おちついた氣持になつてまゐりましたが、又々港の樣子が氣になつて、もとの頂點へのぼりました。軍港には四五艘の大艨艟と其他數多の大小汽船から木葉舟に到る迄、薄ぼんやりとくすぶつた海面に呑氣らしく浮んで居りました。私が船を見るときの感じはいつもかうでございます、それは船といふものはいつも何をしてるのか別に用事もなささうに呑氣に浮いてると思ふこと。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此處は一かど俗世からはなれた場所であると思つてゐましたのに、こゝにもやはり港の喧囂は響いてまゐりました。機械工事の音響其他のわずらはしい雜音。殊に廣目屋の囃しの中でも最も卑俗な乃至劣惡なものとして常々から妙な反感を抱いて居る。ドン／＼ドンチキチンチン、が手にとる襟に聞えて來んでするもの折角の神聖を汚された樣な氣がしてうんざりしてしまひました。足の塵を拂つて逃げる樣にもとの凹地にかへりましたがそれでも幾分俗界のひゞき――ホヽいかにも超人めいて――は達しました。けれども暫時して心持がだん／＼變つてまゐるのを感じました、この靜寂を破つて聞えて來る俗界のおとづれが、或る異なつた意味で却つて或る神秘さをます樣にも思へて來ました。殊た松林をぬふてあの靜かな方の港から、おくられて來るらしい、一定のゆるい間隔を保つたカーン、カーン、といふしんみりした調子――舟大工が家ぶしんの音でせう――が如何にもこの場合私の氣に入りました。いつの間にかそれもだん／＼私の注意から去つて、殆んど無我境に運び去られた操にやがて反對に神經の聽覺とでも申すものが鋭敏に働いて來ました。端然と腰かけた私の眞正面に向つた松林が、次第に展開して行くかと見ると、私の周圍をぐるつととりかこんでしまひました。そして私をかこんではてしなくつゞく木立のはるかな中から無數の夏蟬の噪音

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が合して、しかも統一ある一定の調音を奏して居るのを聞きました。私はいつでも今でもそのつもりで耳をすませばいく分この音を聞く事が出來るのでございます、さてこゝに私は今一つ大なるよろこびを以て先生にお話し申上ねばならぬ事を持ちます。それはこの時私がある刹那われならぬ何物とも知れぬ力に打たれて我身を松の根がたに投げかけると、常には冷かな私の眼から止め度もなくあつい〳〵涙があふれ出した事でございます。私はまことのいのりといふのを此時はじめて經驗いたしました。勿論懺悔も致しました。此時の私の心もちは何と申上やうもございません、たゞ私の流した貴重な涙は悲哀の涙と申すより寧ろいふべからざる歡喜の涙であつた事を御承知下さい、人は誰でもかゝる場合、かくあるものだらうとおもひます。

茲に於てか單に此の一事實から見して私が○に送られた事は如何にはかり知るべからざる大能の攝理の御手の下にありしか、又此事にのみ限らず。すべて私どもいと小さき人間のかれこれと憶測するだにかしこくも、おこがましき事をはじたのでございざます。

日はすでによほど西空に傾きました。我にかへつて二三歩あるき出しますと、ふと前方谷一つ超えて向ふの山におどろしべき長大な私自身の陰を認めました。それはまばらな木の間からぬつと半身を出して動い

て居るのでした。夕日は今を最後の光と一きは强い金色を放ちました。此時ふと足音がして地から湧き出たかの樣に忽然と一人の老人が木陰の路からあらはれました、背にはやはり薪を負ふて居りました、恰度先程から目の先にぽつつり鳥居が立つて居て白取神社の額はありますが、あたりにそれらしいものも見えませんので不思議におもつてる矢先、早速物語りめいたこのお爺さんに聲をかけて尋ねますと。

『それははあ、あの二本松の見える。あすこでがんすよ』と節くれ立つた指でさす手を見れば、こゝから山つゞきではあるがこの連山での最高峯と見える、遙かの山の頂邊になるほどそれらしい建物を見出しました。私の好奇心は尙ほお爺さんにいろ〳〵とたづねました。お爺さんは道をいそぎながらもお宮の事について説明して呉れましたそれはこゝから半里たらずでなか〳〵靈顯のある神樣なさうでございます。

『わしやあ、はあ、あすこの守で一人きりとまつとりやすのでありやす、へえ夜の十二時頃來て見てつかわさい、女衆の七人や八人はきつとおこもりに來よんなさりやすで人の絶間てやがんせん、行者が來なさいますけん』『へえ、藝者が、あんなとこへ?』と丸るい目をしますと、爺さんは至極眞面目で。

『否、行者、』

と云ひながらちんと手鼻を一つかむと、ど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ん〳〵私の歸る反對の途をとつてあのしづかな港の方へ降りてつてしまひました。

私は急に淋しさと覺えました。私はやつばり獨りぼつちでかへり路につかねばなりませんでした、今一度名殘を惜みませうと先程の見はらし場の上に立ちました。夕日は殆んど傾いて薄白い雲の蔭にかくれ、雲と雲の間から大空に向つて斜に光の線を投げて居ました。恰度その眞下に島と島とが迫つて一道の水門をへだてゝくつきりと、しかも一段高く見える純金を盛つた海の一部分が開けて見えました、こちらのどんよりと鈍色におどんだ海に對し細い水門から、たら〳〵と黄金のしたゝりを見る事が出來さうでございました、私はかつて好んだ海音の一節を口吟みました。

『おごそかに今、日は西に入り――
　紺青ながす海の面――
しずかに湧くは、何のさとしぞ』

でもそれまでこゝに獨りこうしてとゞまるわけにもまゐりません。

『……夕日かゞやくガリラヤの
海にもまさり、ふかきかな』

の一切を歌ひました。何だか自分ながら、いつもになく、すみわつたてきこえました歸つたのは明るいうちでございましたけど可成おそくでございました、御飯の時三人のお話しがはずんで〇〇の皆さんの御うはさも出る、昨年の〇〇の傳道のはたらきや慈善事業の手柄ばなしから、クオ・ワヂス

の活動寫眞について話に華が咲き、到頭八時半になつてしまひました、例の活動寫眞は非常によかつたさうで〇では教會の信者の事業として三夜開演になつたさうでございますが先生も折あしくごらんになれませんでした事とおもひます、Tさんだけお一人いゝ事遊ばしたわけでせう、木曜日に〇〇から先生がいらつしやればこちらで四人の幼兒の洗禮があるさうでございます、何にしても御目度いことゝ存します。

どうかお身體の上にも神の祝福ゆたかにあらせられます樣、御榮のためおいのり申して居ります、私の申す事はとかく俗惡に流れていけません、どうぞいゝ子になつて〇〇へ歸りますから、もと〳〵どほり可愛がつてやつて下さいまし。

大正四、二、二。

活動寫眞と歌舞伎座の一月 —— 岡田八千代

歌舞伎座の二月――岡田八千代

遅れて行きましたので『鵺退治』は見ませんでしたが『實錄千代萩』の田村邸假牢から見ました。左團次の荒木和助はちと立派過ぎるかたむきがありましたが結構です。芝居も此の和助位を標準にしてあとの役々もより以上に立派だつたらさぞ力を入れて見る事が出來やうものをと思ひました。もう一役の原田甲斐は、之も結構です、立派さ加減に於いても、八百藏、小團次の古老を向ふに廻して少しの見劣りもありません。然し、和助と比べると、その格が大して違つて見えぬ處に、私としての小さな不足があります。とは云へ、もつと立派に格を大きく見せたなら、今度は端が落ちて來るでせうし、なか／＼役者もむづかしいもんだと思ひました。さて對決は一通りで、後虛病を使つてから一人舞臺となつてグイと器量が上りました。小姓の持つて來た藥湯を呑む處、其小姓が置いて行つた小刀に目をつける處等も落ついて居て結構でしたが、あの『お藥湯』と云つた茶椀の中には何が入れてあるつもりで呑むのでせうか、夫は兎に角、『ウム』と決心の色を見せて脇差を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

素早く取つて左の袖下に隠して四邊を見廻す處の眼光は鋭くて好うございました。廻つて襖の蔭からスーッと出て切りつける處、廻つて追ひ込んで來る處も殺氣は充分でしたが少し凄味の點がどうかと思はれました。落入りは凄味も利いて難がありません、そして此死骸を高く舁かせるのも役が立派になりました。

延二郎の神並三左衛門も結構です、和助に別れを惜しむあたりも情があり、次の水戸海道で朝比奈とのタテに力あまつてあせつて來る處、對決の場で悪びれず甲斐をやり籠める處等、水々とした若さも見え、白廻しがきび〳〵としてゐて好い心持に見られました、この優としては樂な役でせうが、少しも投げずに氣を入れてゐたのを嬉しく思ひました。

右團次の朝比奈彌太郎。力者と云ふ格腹ではありませんが、大分厭味が拔けてさつぱりとして來たので見られました。この優の藝風はどこかに厭な處はあるが、まだ固つてゐないから、勉強次第で存外さつぱりとした好い役者になるかもしれません。つい此間の事ですけれど、『鯉つかみ』の時よりは今度の方が大分好くなつてゐます。八百藏の水戸黄門公は、もう少しゆつたりとした處があつたらばと思ひました。二役板倉内膳正は、親切なさばき振りが好うございます。三役の片倉小十郎、これが一番に好うございます。然しどれもこれも人の役を引立たせる丈のやうな場合にばかり出るのでお氣の毒に思ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然し此優で締めてゐるには違ひありませんから決して無駄骨にはなつてゐません。小團次の伊達安藝、いつかも此役で當てましたが、今度も結構です。評定所で兎角咄辨の爲め物言ひの澁る心持などもよく見え、手を負つてからも騷々しくないのは流石年巧だと思ひました。二役の松前鐵之助は、思ひ入は些と事々しいと思ひましたけれど、まづ立派です。芝鶴の酒井大老は品が足りません。歌之助の腰元は、もう少し膝が折つて欲しいと思ひました。千代麿の龜千代君は品もあり、おつとりしてゝ好い子柄です、科も少し糸に乘り過ぎる厭ひはありましたが、とに角あれ丈動いて下卑ぬ處は感服です、夫に口跡の美しいのも見物の氣を充分引きよせて、いたいけに思はせます。第一落着きのあるのが何よりだと思ひました。八十助の千代松、八十助は時雨さんの『丁字みだれ』の時に見て、只陰氣な子だと思つたゞけでしたが、今度は顔もずつと美しく、花道の出に兩手を膝に下げて少し首を右へかしげてうつむけた形に、まづ見物の同情を引いて、これ丈でも氣の弱い人を泣かせさうに見えました。千代麿はどこかに透のない藝だといふ處が見えて感服しましたが、この子のは又ゆつたりとして、どこかに大きな處のあるのに行末の頼もしい氣がいたしました。兎に角、今までの兒太郎、千代の助は巧者ではありましたが、可愛げがなく、いたいけの處がありませんので厭でしたが、今度の此二人は藝も巧者でありながら何處迄も子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

供らしい可愛らしさが失はれてゐないのが大變に嬉しく思はれました。どうか、此まゝ延びて行つて貰ひ度いと思ひます。歌右衛門の淺岡、子役二人を相手の愁歎は定めて骨折の事と察しられます。そして此長丁場の中、少しも形の崩れぬのには流石此優だけの事はあると感服の外はありません。『伽羅千代萩』の政岡も見ましたが、今度の方がグッと好いと思ひます、大變に情のある淺岡だと思ひました。局の中に混つた兒太郎の松島は一際美しう見えました。芝雀の澤田の局は、かう云ふ役になるとすつかり容貌が落ちて、科も目つきもぎすぎすして昔のこの優を見るやうで厭になります、米藏、市之亟の局は普通です。

中幕『妹脊の門松』の質店は今度隱退の齋入の出しものですが、先程帝劇で出したばかりとは云へ、今度は一座が上形揃の故かグッと力を入れて見る事が出來ました、ことに芝雀のお染は美しくも可愛ゆくも、しをらしくも、哀れでもあつて、まづ珍らしい好いお染だと思ひました。かげで『久松、久松』と呼びかけてから走り入つて久松の側へうち傾いて座る處の色氣、『昨夜もかゝさんが此文を見付けさんして』で久松に宛てた文を見せて泣き、久松を打たうとして袖の中から手を出して、襦袢の袖を振りあげて腹帶を見られて辱かしさうに顏を隱す處のあどけなさ、母親に呼ばれてもなかなか久松の側を離れず、久

松が涙を拭いてやるので得心して義太夫の『裾もほら〳〵』で見返り勝にチョコ〳〵と歩いて一旦引込み、直ぐ出て來て又びつたりと久松の側へ座り、久松に『モシ』とたしなめられて、『イヽー』としてすねながら這入るまで、何處か人形身の處はありましたが、上手いものだと思ひました。紫地に破廉の葉を色入に染めた振袖に襟をかけて緋の下着と云ふ着附も好うございました。二度目に出て久松を打たうとする久作を袖の下から手を合して拜む形も可愛くて好く、母が出てから、すべてうち端な科も大どこの娘らしくて、こまつちやくれてゐないのが嬉しく思ひました。右團次の久松、大分當込をやつて見物を騒がせるのは不可ません、例へば父親の來たのを見て、ペタリと座つて『まアお父さんかいなア』と無暗に首を振る處などその一ッです、今の若さにあんな事で見物を當てやうと思つては不可ません、舞臺はもつと正直に勤めるものだらうと思ひます。然しまア大分に怒つたやうな顔の無くなつたのは結構です、けれ共、あのお染である以上、も些つと此久松が美しかつたらばと思ふのは慾でせうか。ですが、久作を勞つて店へ上る邊は流石ほんとの親子だけに舞臺以外の情が自然に籠つてゐて好うございました。歌右衞門の母親は、若すぎて、そして余り意氣に見えました。齋入の久作。花道の出から油屋の店へ上るまでが大變寫實のやうに思はれました。久松に逢つて喜ぶ處から、久松にやり込められて俄かに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

怒りの込みあげて來る變り目などもあざやかなもので、お染に止られて急に心弱くなり次第にこの悲しみが恨みに變つてゆく邊、一々に心の動きがはつきりとしてゐて面白く思ひました。まだ〳〵此優が引込んでましふのは惜しいやうです、莚八の讀賣は上形と云ふ氣分には少し離れて居ました。

二番目の『櫻美多禮』は榎本さんの新作ですが、たゞ舞臺面ばかりに重きを置いたやうな作で、どこにも力の這入る處がないと思ひます。第一『櫻みだれ』といふ外題に對しても、もう少し助兼が世を恨んで刀を打つといふ處に力を入れて慾しかつたと思ひました。一體に助兼よりもお浦、彌七を重にしてあるだけに力が弱いのではなからうかと思ひます。右團次の助兼は、筋が筋だけに力の入れどこの無いやり憎さうな役をよく演つてゐました。ことに娘の香箱を見てゐる藤兵衛をそつと見て、ハッとしてうつむく邊はさくに心を用ひてゐました。二幕目のやれた裝も好く、刀を拔いて『新の作ながら……』と見惚れるご風の音になり櫻の散つて來る邊、いつもながらしんみりとして好く、窓の處にもたれて木なしに廻す處も、兎も角もよくあれ丈に工風したと思ひます。さだめし力あまつてもの足らぬ事と思ひました。延二郎の彌七。序幕助兼の內で、菅笠に包を背負ひ、『庭のをしへ』の織殿の相方で出るから色つぽく、『まア一寸顏を見て』で笠を取り『のろい奴つちやな』

で髷のはけ先を直す處、一寸した事ですが東京の役者には出來ぬ柔さだと思ひました。髮を撫でつけてるお浦を柱につかまつて見惚れる處、思はずき覗込んでお浦に驚かれ『へイ御きげんさん』といふ處、ちつともお浦の事は忘れなかつたと云ふとお浦が思はずより添ふので自分もうつかり手をかけやうとしてハッとして離れる處、思つてゐた女子は誰れと聞かれて、『お浦、お前や』と云つて兩袖で顏を隱す處、何れもいつもの延二郎式と云へばそれ迄ですが、雁次郎のやうに大袈裟な處がなくて、もちつと實際らしい、そして柔かな味と色氣とを離れず、思はず見物を魅してしまふ力は上手いものだと思ひます。湖水の場の鬚はどんなものでせうか、ひげをつけずとも外にやつれを見せる工風はありさうに思はれます。妹が行つてしまつてから、兩足を裾にくるむのは夕風が身にしむ趣が見えて好く、花道へゆきかけてお浦としらずにお浦に氣の引かれる處に好く刀を持つて出た處の殺氣だつた顏も好うござりました。右團次の世之助、白くしたのは好かつたのですがわざとらしい憎々しい口の利き方をするのがいやでした、米藏の妹お種は好い出來です、この優も大分巾がついて來ました。芝雀のお浦は彌七に鏡を覗かれて驚く處も可愛く出來、彌七の話に聞きとれて思はず彌七の膝に手をつけて恥かしさうにする邊、思ふてゐたのは自分の事と聞いて『彌七さんお當てやす』と座布團を出す邊、可愛げもあり色氣もあつてその外に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

如何にも幼な馴染らしい、親しさの見えるのが何よりの出來だと思ひました。次の縫村の場で病やつれのした樣も好く、自分の爲めに罪を犯した彌七の爲めに髮を切る處も哀れが利きました。歌十郎の七藏は前幕が好く、芝鶴の刀屋、市の亟の女中はのんきさうに見えました。八百藏の藤兵衞、隨分榮えない役ですが好く氣を入れてやつてゐました。つくりも大變に好いと思ひました。

大切の所作は見ませんでしたから略します。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□毎月校正を濟ますとほつとしますけれど直ぐ後からいら〳〵して來ます。何故こう引きしまつたものが出來ないのだらうと情なくなつてしまひます。自分の無能が悲しくなります。でも兎に角出來る丈けよくしたいと努力はしてゐます。二ヶ月三ヶ月と進んでゆくにしたがつてだん〳〵苦しくなつて來ます。然し私は何時迄も〳〵その苦しみに堪へてゆかうと思ひます。

□前號この欄に私が生田花世さんが雜誌を出されるさいふことに就いて一寸したムラ氣からヒヤカシを書きましたら時事新報紙上でセラシイからのけんかださ嘲笑されました。ウツカリ口のきけない世の中だとおもひました。

□今月はボンヤリしてゐたものですからすつかり何にも出來ないで日が經つて仕舞ひました。「生田長江氏の超人の哲學、」阿部次郎氏の「三太郎日記」は來月號できつと紹介いたします。おしからず。

□障子社の展覽會が三日から七日迄向ふ五日間京橋區柳町東中通り（南傳馬町下車）彌博堂で開かれます。眞田久吉氏埴原桑喜代氏、淸水太助氏、奧村博氏の畫が出品されます。

□白山の有朋堂で、模範原稿用紙を賣り出しました。氣のきいた中型の使ひいゝ原稿用紙です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一册金貳拾五錢(郵税壹錢五厘)

■前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓

■廣告料(一頁)特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、(半頁)七圓

■振替貯金口座は(東京二一一一六靑鞜社)に拂込まれたし。

■郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)。

■編輯事務、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は靑鞜社へ。

■雜誌購讀に關する一切の事務は靑鞜社へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正四年二月廿五日印刷納本
大正年三月一日發行

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
靑鞜社內
編輯兼發行人 伊藤野枝

東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷人 篠田玉三

東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷所 大精社

禁轉載

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町九十二 靑鞜社 振替東京二一一一六番

發賣所 神田表神保町三番地 東京堂 電話本局四五六一番 振替東京二七〇番

昭和44年10月30日発行　【第7回配本】

青鞜第5巻　3月号

編著者　平塚　らいてう
発行者　藤原　正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN PER PL 756 S45 v.5 no.3

University of Colorado at Boulder
[redacted] 6746505

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER